
英雄になろう

ホワイトナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄になろう

【Zマーク】

Z1320D

【作者名】

ホワイトナイト

【あらすじ】

「英雄はつくられる」そんな衝撃的事実を知った中学生、岩切は
心の中で夢想していたファンタジーの世界へ放り込まれてしまう。
彼は英雄となり、元の世界に帰れるのか？今賽は投げられて、運命
の歯車は回り始める・・・

プロローグ（前書き）

人生で最初の連載小説です。
至らない点ご容赦ください。

プロローグ

「超能力とかあつたらな～」と思つたことのある人は多いと思う。普通の人間にはない「才能」を欲するのはそう不自然なことではない。

だがそれがあまりに現実からかけ離れている事象、空を自由に飛べるとか不死身の肉体とかを夢想する人は「現実と向き合つだけの力が無い」と周囲からレッ テルを貼られる。

しかし本当に力が無い人間だけだろうか？

現実世界で十分成功している人間にも、その現状に飽きている者は少なくないだろうし、その中の何人かが、現実的にありえないファンタジーな世界を望むのはある意味自然なことではないだろうか？

この命題を本気で考えた者の手により、物語の幕は開かれる。

第一話

まずい、マズイ、不味い、mazui… 文芸愛好会部員、俺こと吉切^{いわきつ} 勉は絶望的な状況に陥っていた。場所は文芸愛好会の部室。中央に長方形のテーブルがあり、周りには部員全員が座っている。

上座（と俺が勝手に呼んでいる）では部長が「人気の出る小説とは」というテーマで部員に書かせたレポートをパラパラ読んでいた。いたつて普通の風景、しかし俺にとってこの状態はやばかった。とくに「部長がレポートをパラパラ読んでいた」の部分が。（つたく、落書きとレポートを間違えて持つてくるなんて、どーかしてるぜ…）

別にそれだけならどうということは無い。そう、ただ間違ただけなら「明日レポートを持つてきます」と断つてから提出しなければ済むことなのだが、俺はあろうことか落書きと勘違いした清書を学校に行く際ゴミ捨て場に捨ててしまったのだ。

しかも勘違いに気づいたのが部長がレポートを読み出してから、そしてその内容が致命的だった。

「…・・・岩切君、君のレポートなんだが、なぜ一枚しかなく全て箇条書きで『18禁な官能小説が人気に決まってんだろうか』とか『部長の書く原稿用紙の無駄遣いとしか考えられない小説以外』などと書いてあるのだろうか？根拠が書いてないようだから聞かせてもらいたいんだが…・・・」

「あーっと、特に無…・・・」

「答えるって言つてんだよこの糞が…！レポートは客観的事実に基づいて書かつて、何度いわせりや理解できんだオラッ…！貴様なんぞに鉛筆持つ資格ないこのペープリンのポンチ野郎…！」

部室がビリビリ振動するような怒号。まだ田の浅い新入部員は部長

の知的な風貌と想像を絶する罵罵雑言とのギャップで、ドン引きするか青くなっている。

「す・・・すんません・・・」

鬼怒川 きぬがわ 龍一、15歳。剣道部と文芸愛好会を掛け持ちする優等生。普段は誰に対しても物腰柔らかな態度で警戒心を「えない・・・そして、軽い一重人格。

その罵声は一般的に怖いとされる生活指導の教師を遙かに超越し、部長を務めている剣道部と文芸愛好会の部員からは「冷静に凶暴」と称されていた。

しかしその指摘はいちいち最もで、優等生タイプの後輩に慕われている。

ま、部長に論説文とか小論文書かせれば右に出る奴はないけど、小説はどれも難解過ぎて不評だったから、俺のこの指摘だけはそんなに的外れなものでも無いだろ?」

しーんと部室が静まり返るきつかけを作ったのが部長であれば、それを破つたのもまたこの人だった。

「・・・・それはさておき、このレポートの一枚目、三行目であるが・・・」

般若っぽい顔が元の知的なそれに戻つたので、部員は全員安堵の表情を浮かべている。

それを知つてか知らずか、部長は続けた。

「この『美少女と少年（容姿は問わず）との純愛物語+ファンタジーがいいんじやネーノ？』といつのは全く同感だ。」「・・・・！」

「書店を調査した限り、この純愛物語といつのは実はなかなか需要が高い。またインターネット上の「ブログ小説」も圧倒的にこのジャンルが多い。そしてファンタジーといつのも年齢問わず人気があ

る。事実私の調べた小説投稿サイトでも人気上位はこの分野のものが多くつた。18禁の小説といつものは読者層が限られてしまうために入気が出るといつても万人受けするものは当然、ない。我が文芸愛好会は需要に合つた小説も書けなければならない。このレポートを次号の部誌のテーマの参考にする、といつことは前に言つたと思つ、そこで・・・・・

部長は一旦言葉を切り、部員を見回した。

「『美女少女が出てくるファンタジー小説』を、次回のテーマとしたいと思う。全員、1ヶ月後の会合までに書いてくれ。今回の会合はこれで終わりだ。」

・・・これはひょっとしてギャグで言つているのか？

この部長は本気で部誌にファンタジーラブを載せよ!と言つてるのか・・・・?

先ほどとはまた違つた意味で引いていた部員は我に帰り、筆記用具を持って部室を出て行つた。

「ちょっと、岩切君」

帰りがけに部長に声をかけられた俺はダッシュで逃げたかつたが、無視すると後がもつと怖いので

「な、何ですか?」と声が震えないように気をつけて返答した。

「さつきはかつとなつてすまなかつたな

「いえ、気にしてませんから大丈夫です。」

「そうか、それなら良かつた。次号の君の小説、楽しみにしてるよ。

「・・・・・は?」

「君、自分でレポートに書いたのだから、当然すごいものが書けるんだらうね?」

レポートのテーマは「万人受けする小説」だから別に自分が書けなくても何も問題ないのだが

蛇ににらまれた蛙状態だった俺にはそこまで考える余裕が無かつた。

「はあ・・・まあ」

「私を失望させないでくれよ？」

分かる者には分かる、部長の絶対的脅迫。俺が嵌められた、と気づいた頃にはもう手遅れだった。

第一話

部長にフレッシュナーと云つたの復讐を受けて、俺はその日非常に不機嫌だった。

放課後はまっすぐ家に帰らず、俺はいつもはサボる図書委員の仕事をするべく図書室にいた。

どうして今日に限って図書委員の仕事をしたくなつたのかは俺自身も分かつていなかつたが。

「ま、いつも通りなんとなくなんだよな～」

なんとなく、直感で。俺は14年間の人生においてこの方法で間違つたことが無かつた。

早めに小説を書いておくか、と仕事が一段落してから俺は原稿用紙を取り出した。

・・・どれくらいの時間が経つたか、2・3本の鉛筆がおしゃかになり、引き裂かれた原稿が机の上に散らばつた以外、何も変わつていなかつた。

「駄目だな、今日はもうひりつてことだ～」

俺は奥の本棚のところに行き、「残酷歴史物語」というアレなタイトルの、しかもジャンルがノンフィクションの本を取り出そうとして・・・

見慣れない、黒いパンフレットを見つけた。

「・・・あん？なんじやーりや？」

いへり仕事をさぼつてこるのはいえ、一応自分は図書委員である。

見たこと無い本なんて珍しい・・・というよりありえないはずだが・・・と思いつつ伸ばした手を方向転換。それを手に取り机に戻る。

「やべ、こんな時間かよ。」

俺は黒い冊子と原稿用紙をバックに入れ戸締りを済ませると、足早に下駄箱へと向かった。

帰り道、俺はずっと不可解な黒い冊子のことを考えていた。

帰宅後、俺はベットに転がりながら、図書室から持つてきた黒い冊子を眺めていた。

「何だろね、これ・・・」

俺は気になつたが、開くのをためらっていた。

直感が「面倒なことになる」と告げているのだ。

しかし今回ばかりは好奇心が打ち勝つて、直感を拒否。

一気に、それを開いた。

「英雄に・・・なる?」

その一ページ目には黒をバックに「英雄になろう!」と大きく金色で書かれていた。

「代わり映えのしない日常から抜け出したい、ファンタジーに生きてみたい、私の才能はこの世界に留まらない、そんなあなたに勧めたい『英雄ツアード!』あなたの才能を生かして異世界でミッションをクリアし、あなたも英雄になろう!・・・・・・か」

くだらない、くだらないが、これは小説のネタに使えるな。このツアードに参加した主人公が、自分の才能を開花させていく。これはいける!

俺は原稿用紙をバックから出そつと冊子を机に置こうとするが・・・
「む・・・これは・・・!」

まるで瞬間接着剤で固められたよう、冊子から手を離すことができなかつた。

そして、俺の腕は自分の意思に反して次のページをめくつた。

次のページには何も書かれていなかつた。ただ黒いページが俺の方に向いているだけである。

俺の腕はそのまま誰かに操られてくるよつてそのまま黒いページに触れた。

「つ・・・！」

声にならない悲鳴、俺は腕から一瞬にしてその冊子に飲み込まれた。意識を失う直前、俺は「やつぱり、開けなかつた方が良かつたな」と直感に従わなかつたことを反省していた。

「・・・さて、意識を取り戻したわけだが・・・」

俺は目を閉じたまま心の中でつぶやいた。

取り敢えず、目が覚めたと誰かに気づかれる前に、自分の置かれて
いる状況を整理してみよう。

床の冷たい感触・・・これはタイルかな。匂いは無し。僅かに聞こ
えるのは衣擦れっぽい音・・・誰かが近くにいるな。タイル張りと
なるところはトイレかな?いやそれならアンモニア臭が・・・

「あんた起きてんだろう?」

不意に浴びせられる言葉。

俺はそれに対し「声はおそらく前方5メートルの位置で発せられて
るな」と推理を深めただけだった。

「・・・まだ寝てるんかな?」

その言葉が合図。

両手に力をこめて体を跳ね上げ、一気に立ち上がる。声を発した人
物の位置を確認し間合いをつめて拳を振りぬく。

・・・それらの行動を僅か1秒弱で行った。

「起きてるんだろ」という問いかけを無視することにより、自分の
考えが間違っていたのかと敵に思わせ、その一瞬の隙をついて攻撃
する!・・・というのが俺の作戦。

「やれやれ・・・血氣盛んなことだね~」

俺の考え方く限り最強の一撃を、しかしそいつは掌でやすやすと受
け止めた。

「私はあんたに危害を加えない。だからあんたも私に殴りかかるな
い、理解したか?」

・・・。

取り敢えず第一撃が避けられたことにより、俺の勝つ望みは絶たれたわけだ。そう考えて拳を降ろした。

その人物は黒いワイシャツに赤いネクタイ、白いスーツを着てサングラスを掛けていた。

そして、金髪美女だつた。

・・・何だ？俺は暴力団の事務所にでも監禁されてるのか？

謎の人物の服装を認識した後、俺は周囲を見回した。

床と壁は黒と白のタイル張りで、部屋の大きさは体育館ぐらいと広く、

中央に仕事机っぽいものがぽつんと置かれていた。

また壁には大量のドアがところ狭しと並んでいた。

「さて、単刀直入に言おう。君は『英雄ツアー』に選ばれた。

今から君には君にとつてのファンタジーの世界『レバーレンス』に行つてもらい、

5つの大国に潜む魔物を退治し、その証拠として彼らの得物を持ってきてもらいたい。

何か質問は？

いやいやいや、もうなんかどうから突っ込んでいいかわかんないよ。

・・・・ここで「意味わかんないんだけど」というのは簡単だが、きつと相手はそういうことを予想してるだろつな

「・・・・そうだな、まず君は何者だ？」

「人に・・・」

「『人に名を聞く前に自分が名乗れ』とかありきたりなセリフ言うのなら名乗るが、

俺は岩切 勉。14歳だ。理解したか？」

美女はあきらかにうざそうな顔をしながら

「私はレリウーリア。異能を持つ者を異世界に送つて英雄となつてもらつ、

君の世界で言つとこりの・・・あー、つあーこんだくたあ？というやつだ。」

ツアーコンダクターってちょっと違う気がするが・・・

「なぜそんなことをしている?」

「お前神様つて信じるか?」

質問に質問で答えるな、と思つたがそれを言つたところで話は進まないだろつ。

「俺は無神論者だ。」

「ふーん・・・まあ神様つてのはいるわけで、ありとあらゆる世界の住人を作る創世主なわけだよ簡単に言つてしまえば。その住人の能力とかはそのとき決定されるんだよね。」

「馬鹿馬鹿しいね。人間は努力したいでどうにでもなるもんさ」

「それは単に努力できる才能があつただけ。・・・そうね、『バスを美人という人はいても、美人をバスという人はいない』って言えば分かるかしら。」

・・・それは、確かにそうかもしれない。

「ただ神でも住人の運命に干渉することはできないわ。ただただ創るだけ。」

ということは例えば住人の誰かが凶悪殺人鬼になつて周りを殺しまくつても神様は止められないわけだよ。」

そりや困りますね。

「と、いうわけで、この『英雄ツアーコンダクター』で英雄伝説を作つてその世界の住人の信仰の対象にするんだよ。それによつてその世界の人間の行動をある程度制御出来るんだ。」

君の世界では・・・そうだな、『イエス』って知つてるか?」

ロックグループ?違うよね。

英雄で「イエス」つていうと・・・

「イエス・キリスト!?

「そう呼ばれているみたいだな。あの男はもともと魔法使いの世界にいたんだ。

旅の途中で様々な奇跡を起こして見せた、つて伝えられてるだろ?」

「そうやって課題をクリアした後元の世界に帰つていったんだ。」

「磔刑になつたんじゃないのか？」

「磔刑になつたのはあいつが作り出した魔法で動く人形だよ。

その後さも復活したように本物が出てつたのさ。んで宗教が出来て、それ信じる奴は己の『信条』に従つて殺人とか盗みとかしなくなつた。

な？」「うやればまとまるだろ？」

「無論英雄つてのは聖職者だけじゃないぞ、劉備とかシーザーとか・・・」

三国志にローマ皇帝ですか。

なんだかとんでもないことになつてゐるような気が・・・

「さて、質問はこれまでだ。命の保障は出来ないが、何年掛からうとクリアすれば元の世界の同じ時間に返してやるから」

・・・ある程度覚悟してたがショックだな。

何年も掛かつたり、死んだりする可能性があるんですか。

「お前の真後ろのドアから行けるから、行つてらつしゃい。」

ここから逃げられない以上、行くしかないか・・・

俺がドアノブに手を掛けたとき、

「あ、言い忘れてた、君には拒否権がある。もし行きたくないんだつたら元の世界に返して

あげるよ。もちろん今までのやり取りの記憶は消させてもらうが。

・・・一番重要なこと忘れてたねこの人。

俺が出てつていつた後だつたらどうするつもりだつたんだろうね。

「どうする？ 行くか行かないか。」

俺は行かない、と喉まで出かかったが、ふと文芸愛好会のことが頭に浮かんだ。

・・・元の時間に帰つてこれるなら、その体験を基にして小説書けるよな。それに今

帰れるつていうのがでなんだつていうんだ？ つまりない日常を繰り返すことができるつてだけじゃないか。これこそ「俺の望んでいたこと」なんじゅあないのか？ 少なくとも刺激の無い腐つた安寧の

日々を送ることを盲目的に求める人間じゃあ無かつたよな俺は。死んだところで心残りなんて別に無いし、こんな千載一遇のチャンスを俺は逃すのか？

「・・・行かせてもらおう！」

「よし、いいだろ。」

そういうと女は突然俺の胸に手を当てた。

「・・・？」

「動くなよ」

その後展開された光景を見ながら「動かないでいる」というのはなかなか難しかった。

なにしろ胸から刀っぽいものがにょきにょき生えだしたからだ。

「・・・っ！？」

それは俺の胸から引き抜かれ、女の手に収まった。

「はいこれ、英雄の証。お前の精神を具現化した刀。ちょっと念じるだけで出したり消したりできるから。」

なんとまあ。これが俺の武器ですか。

その刀・・・と言つていいくのだろうが、それは目の粗い両刃鋸をそのまま巨大化させたような異様な形状をしていた。

・・・なんか、主人公が初めに貰う武器つていうより、ラスボスが持つてそうな得物だよな・・・

「これが俺の精神かい。もっとスマートだと思つてたがな。」

「さあ？どうだろうな。さて、これで本当にお終いだ。」

女は微笑んでいるようでそうでもない微妙な表情で「行ってらっしゃい」と言つた。

「・・・行きますか。」

俺は決心が鈍らないついで、一気にドアを開け、記念すべき一步を踏み出した。

さて、今俺は異世界にいるわけだが……

俺の記念すべきスタート地点は、森の中だった。

マイナスイオンたっぷりなその空間に、俺は和んだ。ふと振り返ると、ドアはもう消滅していた。

空を見上げながら、俺は思った。

これからどうしよう……

いつも通り直感に従つて行動してもいいがここは異世界。とりあえず一步間違えば死ぬと考えて差し支えないだらう。となると少しばかりは考えたほうがいいか。

まず……なるべく正確な地図。後は金。

装備は……

そこまで考えがいたつて、俺は初めて自分の服装を見直した。学校帰りの制服のままだった。

・・・まあこれも結構動きやすいし、なんだかんだで軍服にちよつと似てるこの服好きだし、

いつか。

武器はこの刀で十分だらう。持つてみて分かったがこの刀、かなり長くて重い。

普通、精神の具現化うんぬんの武器って「意外と軽い」のがセオリ一だと思ったが……

まあ、これだけ重さがあれば当てるだけで切れちゃうだらう。一応剣道初段持つてるし、扱えるかな。

考えがある程度まとまった俺は、ぶらぶら森の獣道を歩き出した。

・・・2時間ぐらい経つたかもしない。いや、もつとかも。

帰宅したら玄関に腕時計を置くといつ普段の習慣をこれほど憎んだことは無かつた。

「おおー、もし今時計はめてたら、今何時かぐらいは分かったのによおおお

つまるところ、俺は道に迷っていた。

えいわは たびだつてこつた・・・「完」

なーんて、洒落になんねえ・・・この状況、水も食料も無い。どう

途方にくれた俺は傍の朽木に腰掛けた。

なんか足のた

西の葉になつた俺が、一つの闇にかこつて浮かんだ一叶を

に出していた。

「それ・・・俺には普通気がかないような『異能』がある。それ

最近だつたけどな・・・ここで俺を死なせたら、損すんぜ・・・

俺は息を大きく吸い、いるのかどうかも分からぬ存在に向かつて
つぶやいた。

「神サンよお」

卷之三

「たあ～すけてえ～ぐださあああい」

お?

おおお？

英雄の出番か！？
よつしや、いつちゅやつてやるぜー

・・・・なんことはそのとき全然考えて無かつた。ただ人が近くにいるということに

安心してそちらの方にダッシュしただけだった。

声を上げた人間は案外近くにいた。

そこには中世に出てくる兵隊のような格好をした男が3人いて、1人を取り囲んでいた。

その人物がこれまた・・・・

「か、かわええな～・・・・」

美少女だった。

こげ茶色のロングヘア、それに覆われたぬけるように白い顔、大きくちょっと潤んだ目、そして水色のワンピース。

文句のつけようが無いくらい完璧だった。

その姿にしばし見とれたあと、素早く脳を回転させた。

・・・・とりあえず今の出来事で分かったことは「言葉が通じる」ということ。

言語から学ばなくちゃならなかつたらどうしようつ、

と本気で心配してたので、これは大きかつた。

あと男達の格好からどうやら中世ちっくなファンタジーの世界だ、

ということ。

敵が銃持つてバンバン撃つてきたらどうしよう、とこれまで心配してたので、これも解消。

と、そんなことを考えてたら男達が俺に気づいた。

「ん？ なんだい君は？」

リーダー格の男がしゃべりかけてきた。

「いえ……別に、通りかかっただけですが、悲鳴が聞こえたような気がしまして……」

「おや？ 私達には聞こえなかつたよ。ここは鳥が特別多く生息する地域だし、聞き間違えじやないかな？」

「……え、まじっすか？」

そうなると俺は穴にもぐつて窒息死しなくちゃいけないほど恥ずかしい思いをしたことになりますけど……

と、そういうしているうちに美少女が助け舟を出してくれた。

「ち・・・違います。私が歩いてたらこの人たちが取り囮んで……その……

く、口に出すのも恥ずかしこよつなことをさせようと……

「つ、馬鹿、言つな！」

おつとおつ？

今の咳きは少女の言つた事の肯定の返事として受け取つていののかな～

「そいつは見過ごせませんね。別に女なんていくらでもいるわけですし、ここは素直に

退いたほうがいいんじゃないですか？ 口・リ・ハ・ンセキよお

「んだと・・・！ めえもういつぺん言つてみひー！」

「どこの誰だか知らないが、答える義務は無いよな」

その言葉にキレたりーダー格は腰の剣を抜くと俺の頭を切りつけようとした。

俺は手の中にあの鋸に似てる刀を出現させそれを受け止めるといふとした悪戯心からこう言つてみた。

「今俺が刀抜いたのが見えたか？ これが俺とお前達との差だ。死にたくなけりやとつとと

失せな……」

俺かつこいいへ、とちよつと思つた。

案の定、本気で俺が刀を「抜いた」のだと勘違いした男達は真っ青になりながら互いに目配せしあつて、ぱつと身を翻して森の闇に消

えていった。

鬪えなかつたのは残念だったが、なんだかんだ大人3人相手はきついだろうし、これでよしとしよう。と考えてると・・・

「あ、あの・・・」

と例の美少女が話しかけてきた。

顔がにやけないよう注意を払つて俺は答えた。

「なんでしょうか？お嬢さん？」

「旅の方・・・ですか？もしそうなら・・・助けていただいたお礼をしたいので・・・

家に来ていただけませんか？」

よろこんでえ！！と言いたかつたが・・・

「お気持ちはありがたいですが、私はただの通りすがりです。お邪魔したら家族の方にご迷惑をお掛けしますよ。」

「いえ、両親とは今別れて暮らしてるので大丈夫です。」

危ねーおい。

「そうですか・・・それならお言葉に甘えて・・・」

地図と食料はこれで解決かなーとか思いつつ、俺は美少女の案内で森の奥へと入つていった。

第五話

歩き始めて10分、美少女の家は森の中でも開けた場所にあった。

「ここが私の家です。」

その指の先、がっしりした感じのログハウスが建っていた。
あ～これなら確かに泥棒とか不審者とか入つてこないだろうな～

「どうぞお入りください。」

「お邪魔します。」

家に入った俺はまず自分の目が正常に機能しているか疑つた。

年頃の女の子の家ということでファンシーなものを考えていた俺は、

目の前に置かれている

熊の剥製に目を奪われた。

「こ・・・これって・・・」

「あ、剥製なんで大丈夫ですよ」

いやそんなことは分かつていますよ。

容姿と家の玄関のギャップに驚きつつ、俺は家のリビングへと案内された。

リビングがこれまたすごい。一言で言つたら「獵師の家」だ。壁には『』やら斧やら掛けられ、

俺の頭上には何かの肉っぽいものが紐で下げられている。小物の類は一切置いてない。

今少女がお茶を淹れているキッチンはここから見えない。が見てみようとも思わなかつた。

俺がいろいろな感想を抱いていると少女がお茶を運んできた。

「お待たせしました。」

「どうもありがとうございます」

俺の前に置かれるカツプ。荒削りな木製だ。

味は・・・まあ普通、かな。

「これからどちらへ行かれるんですか?」

少女の問いに、俺は茶を吹きそつになった。

・・・まずい、俺はこの世界のことを「ほとんど何一つ」知らない。旅人なのにどこ行くか知らない、なんて答えたらいかれてると思われるだろ？

やべえ、相手が首かしげて不思議そうにしてるぞ、どうする俺・・・「・・・特に目的地があるわけではありません。色々な場所に行つて見識を深めるというか、

自分探しの旅、見たいなものですかね。

我ながらつまくもない誤魔化しだな。

「そうですか・・・」

どこの出身ですか？なんて聞かれる前に俺は急いで話題を変えた。

「そうだ、もし良ければ水と食料を少しばかり分けていただけませんか？丁度尽きてしまったもので・・・」

「え？ええ、いいですよ。」

少女がキッチンの方へ向かうのを見つづ、後地図を見せてもらつたら早いとこ切り上げよ？、と考えていた。

しばらくすると少女が戻ってきた。不思議なことに包みを一つ持つている。

「あの・・・」

「何でしちゃうか？」

「さつき私、両親と離れて暮らしている、って言いましたよね、あれ嘘だつたんです。

もう両親はこの世にいません。2年前に死んでからずっと一人暮らしなんですよ。」

「・・・何が言いたい？」

「そうだったんですねか・・・」

「私、内気な性格なんで、森の外に出たことないんですよね。水や食料は全部森で手に入りますし・・・でもあなたのお話を聞いて、

このままじゃ駄目だつて思つたんです。町がどうこうとか知りたいですし、

怖がつてばかりじゃ何もできないつて……

まさか……？

「あなたの旅に、こゝ一緒にさせていただけませんか？」

きたへこの展開。

さて、どうしたもんどうう？

普通に考えれば、こゝは断るべしだ。俺の旅の目的は魔物をじゅんじゅんぶつ殺して武器を

奪つてくることだ。お世辞にも安全とは言いがたい。

しかし……こゝで熟慮しなければならない一つの要因があつた。一つは地図のこと。こゝで断つて地図だけ見せてもいい、といふわけにもいかないだろ？

もう一つのこと。さつき俺はお茶を待つてゐる時に本棚が視界に入り、こゝそりと一冊抜いて

読んだ、いや読もうとした。

わけわからん文字で書かれてさえいなければ。

どーして言葉は通じるのに読めるようにしてくれないんだよ……

この先、どうしても文字を読み書きしなければならない状況に出会うだろ？

この少女は2年前まで両親と暮らしていたのなら、おそらく両方ともできる。

こんなチャンスこの先来ないかもしれない。さてどうするか……

「是非」一緒に、と言いたい所ですが、私はあなたをお守りできるほど強くありません。

残念ですが……

俺は断ることにした。読み書きなんて町に行けば誰かに頼めるだろう。

しかし少女の返答は俺の想像を遥かに上回った。

「それなら大丈夫です！自分の身は自分で守れます。」

しょんぼりするかと思いつきや顔に満面の笑みを浮かべてこれだもんな。

少女は壁に掛けられている武器の中からじつにクロスボウ（洋弓銃）を取つた。

「斧とか剣はうまく扱えませんが・・・これなら自信があります。玄関に熊の剥製がありましたよね？あれも私が仕留めたんですよ。」

あれ、両親の形見じゃなかつたんですか？

普通に俺より戦闘能力高いんぢゃないんですかひょっとして。

「どうかご一緒させてください」

やれやれ。これで俺が断る理由が無くなつちまつたな。

「分かりました。いつ終わるとも知れない旅ですがこれからようじく。」

「ええ。よろしくお願ひします。」

「・・・そういうえばまだ名乗つていませんでしたね。イワキリ、と申します。」

「ベルフェゴールです。ベルフェ、と読んでください。」

少女 ベルフェゴールは微笑んだ。

その顔を見た俺は、ああ、これだけでこの異世界に来た価値あつたなーと密かに思つたりした。

第六話

ベルフェゴールの案内で3時間程歩きようやく森をぬける事が出来た。

森をぬけたところは大草原といった感じの平地で、そよ風に草がなびいていた。

地平線付近に街の門らしきものが見える。

俺は森の中で隣の相棒に教えてもらつたことを思い返す。

まずこの世界には五つの大陸があり、それぞれアンドラス、セラティエル、ニスロク、

マシュイト、タグリヌスという王家が納めているらしい。一応国交があり大陸間の移動は

そう難しくなく、この五つの大陸全体をまとめて「レバーレンス」と呼んでるということだ。

そう聞くと捻くれてる俺は「じゃあ海を越えた向こう側には何があるのかな~」とか思つたり

するが、彼女の話によるところの世界ではあまり航海技術が発達しておらず、せいぜい近い大陸

間の移動ぐらいしかできないそうだ。まあ俺をこの世界に放り込んだ女の言葉を信用すれば、

(信用したく無いのだが) この五つの大陸を巡ればいいわけだから、あんまり関係ないだろう。

ずーっと海を渡つてけば日本についたりして、なんてくだらないことを考へてると、

「イワキリさん。」と緊張した声が聞こえた。なんじゃ?と思つまもなく俺の視界には現実と

認識したくないような映像が映つた。

なんと形容したら良いか、牛の頭に腕が四本ある人間の胴体がくつついていて、背中に

たてがみがある生き物と言えばよいのだらうか。そんなのがいた。
しかも「匹ほど」。

これは・・・ファンタジーでお約束の魔物つてやつかね。

「どうします？イワキリさん」

「俺は良く知らないんだけど・・・ここからって強いのかな。」

と思わずいつもの口調で返してしまつ。しまつた、と思つたがベルフエゴールは特に気にしてないようだ。

「私は魔物を狩つたことは無いので分かりませんが・・・」

つてベルフエゴールが言つてことは魔物なんだな。

普通出くわしたら、俺なら逃げる、が・・・

あの女は「魔物を倒せ」と言つた。と言つことばこそつがその中の2匹かもしれない。

「俺が倒すから、ベルフエは・・・」

「もちろん戦いますよ。」

有無を言わさず、と言つた感じだ。

やるか。

やりましょう。

そう言つた俺達は横に飛び、魔物の頭上からの一撃を避けた。
さて、殺し合いを始めますか。

不思議と恐怖は無い、緊張はしているがそれが良い方向に働いているのを全身で感じる。

俺は刀を出すと、正面に構えた。

やつと名前を呼んでもらえた。

彼が「やるか」と言つてくれたとき、私は嬉しそうがこみ上げてくるのを感じた。

信頼されている。

それは両親が死んでから一人で過ごしてきた私にとって、砂に水が染み込むように心が潤う出来事だった。

高揚感に身を任せつつ私は一気に化け物と距離を取り、クロスボウを出し矢をつがえる。

距離は大体10m。

どうやらこの生き物、見た目ほど頭が悪くないようで、私のクロスボウに警戒してか距離をつめてこない。

一発外した隙を突くつもりかしら。

迷わず私は胴体に撃つ。

予想通り魔物は矢をかわすと、私に襲い掛かってきた。

残り7m。

私はクロスボウを捨てると、腰に差していた狩猟用ナイフを投げつける。

「私の武器はクロスボウだけじゃないわ」

魔物は距離が近かつたためか、今度は腕で払い落とした。

残り4m。

魔物の勝ち誇った顔が視界に入る。

私は思わず笑つてしまつ。

ああこの魔物、頭はまあまあみたいだけど完全に経験不足ね。

残り1m

魔物は振り上げた腕を私の頭上に・・・・振り下ろさなかつた。

「グ・・オオオオオオオオ？！！」

雄たけびを上げつつ胸をかきむしり、地面をのた打ち回る。がそれも程なくして止まる。

僅かな切り傷で死に至らしめる激毒。

それが私の真の武器。

結局見かけ倒しだったわね、この生き物。

私は矢とナイフを取りに行つた。

「オラアツ！」

「フゴオオ！」

ぶつかり合う刀と拳。

やはり化け物は一味違う。いつもあくび交じりに剣道部の奴らと相手している俺も今は久しぶりに本気を出している。

魔物の腕は後3本。1本は初太刀で切った、というか切れてしまった。

この刀、まるでバターを切るみたいに丸太みたいな腕を切っちゃうからね。

俺もこの化け物も一瞬呆気に取られちゃったよ。

腕は残り3本だが、相手も俺を強敵と認識したらしい。刀の刃の部分に触れないように内側から俺の斬撃を弾いている。
しばらくは一進一退だったが、徐々に体力の差によってか俺のスピードが鈍ってきている。

・・・そろそろ決めないとな。

俺は拳のラッシュを避けつつ、じりじりと距離を取る。

拳の射程から外れたため、魔物は拳を止めると一步近寄った。

・・・それが死への一步だぜ、化け物ちゃんよお。

俺は刀を地面に突き刺すと、そのまま跳ね上げるようにして土くれを相手の顔に浴びせる。

「ムゴオ！」

不意を突かれた魔物は顔に掛かった土のために田をつぶつてしまつ。間髪入れず、俺は胴を深々と切り裂いた。

静寂。

魔物は断末魔の悲鳴すら上げずに倒れた。既に絶命している。辺りを魔物の血が染める・・・かと思いきや、血は一切流れず、切り口から煙のようなものが

上がり、やがて全身が灰になつて消滅してしまつた。

魔物の最期を見届けると、俺は周囲を見回す。

どうやらベルフェゴールは既に敵を片付けて矢を取りに行つているようだ。もう1体の魔物の死骸も灰になつていた。

取り敢えず身の安全が確保されたことを知つた俺は、その場にへたり込んだ。

あ～疲れた～。

ベルフェゴールの家を出たのが昼頃、今はもう夕方になつてしまつている。

早いとこ街入つて寝たいな～。

と布団の寝心地について妄想していると、

「イワキリさん、やりましたね！」と嬉しそうな相棒の声が聞こえてくる。

「ああ・・・ベルフェ、お前つてやつぱり強いんだな。」

「フフ・・・イワキリさんだつて。」

輝くような笑顔に、俺の疲れもちょっと癒える。

つかの間の休息。俺とベルフェはともに、程なくして街へと急ぐつもりであった。

しかしその甘い考えは、突然の闖入者によつて打ち砕かれる。

「おーやつぱり強いねーー一人ともーー」

俺らは振り返つた。

そこには夕日をバックに、赤と白の縞々のスーツといつこれまたぶつ飛んだ服装の男がいた。

顔は美形だが、逆光のためなのだろうか、非人間的な妖氣を漂わせているように見えた。

「今のは僕の部下だよ。力試しも兼ねてかなり強いの当てて適当にあしらわせるつもりだつたんだけど、まさか倒しちゃうとはね～。」

「なんだと？」

「君達はイワキリ君にベルフェゴールさんだね。初めまして、エウリノームといいます。以後

お見知りおきを。」

「誰・・・あなた？それに部下つて・・・」

「まあ簡単に言つてしまえば、『こら辺一帯の魔物の親玉かな。』

その言葉に、俺は疲れた体に鞭打つて切りかかる。

が、その刀は素手で受け止められてしまった。

「駄目駄目、今之力じや僕は倒せないよ。取り敢えず街でゆっくり

休みな。これから君達は新しい仲間にも出会つだらうしさ。」「

「な・・・なんでそんなこと・・・」

「ん？『何でそんなこと分かるのか』っていうのと『何でそんなことわざわざ言うのか』っていうののどっちを聞いたのかな？まあどっちも答えてあげるよ。最初の質問、それはそうなる運命だから。「なめやがつて・・・」

「いや、真面目な話。僕に分かつて君には分からない。それだけさ。あと2つ目、僕は自分と釣り合わない相手とは戦わないことにしている。つまんないし、死に行く相手の『これじゃ死んでも仕方ない』っていう諦めの表情見るのがそれこそ死ぬほど嫌なのさ。最後の最後まであがくことを忘れて死に逃げる、そんな奴らの始末は手先にやらせりゃいい。僕が相手するのは君達みたいな精神的にも肉体的にも強い相手だけ。名誉なことだと思うよこれは。だから、君達には万全の体制で臨んでほしい。そしたら・・・」

突然、その微笑がまるで口裂け女のそれのようにキューっとつり上がりつた。

楽しくて楽しくて仕方が無い、といつた子供じみた、しかし人間らしくない笑顔。

隣のベルフェゴールを見ると、さつきまでの冷静な態度が嘘のよつに、震えていた。

おそらく俺と同じ・・・あの笑顔に恐怖しているのだらつ。

「殺してあげるよ・・・・ウフフフフフ。」

俺とベルフェゴールが我にかえたのは、男が消え、今にも沈もうとしている夕日が目を刺してからだった。

第六話（後書き）

この物語始まって初の戦闘シーンでした。
今後も戦いの緊迫感等、つまく伝えられるよう精進してこきます。

第七話

街の門をくぐるまでの道中、ベルフェ「ゴールはずつと不機嫌だった。
「どうして、そんな大切なこと言つてくれなかつたんですか！！」
最初に俺は「どこに行くのか」と言つ問い合わせに「無目的だから決まつてない」と答えてしまつた。そう、魔物討伐という目的があるので
も関わらず、だ。

こんな怒るんだつたら打ち明けなかつた方が良かつたかな、とじょ
つと思つてしまつ。

「悪い・・・どこに魔物がいるかなんて分からなかつたから・・・
「それじゃ嘘ついたことの説明になつてしませんよ。」
・・・確かに。

しかし口をすべらせたがごとき失言、これ以上説明の仕様が無い。
ふと、ベルフェゴールの表情がそれまでのムスッとした物から、今
にも泣き出しそうな顔に変わつた。

「私が・・・信用できなかつたんですか？もともと最初から打ち明
ける気なんか無かつたけどあのエウリノームつていう魔物が現れた
から仕方なく話した。ってことなんですか？」

「違う・・・違うけど、確かにそう疑われても仕方ない。ベルフェ。
・・・こんな危険な旅に付き合わせようとして、悪かつた。街に着い
たら別れよう。」

「・・・そうさせでもらいます。」

空は今にも沈みそうな夕日と夜の紺青色どが混ざりあつていて
その光景は、溝がある俺とベルフェとの関係と対照的だ。
俺は空を羨んだ。

街についてからのことば、あまり良く覚えていない。気がついたと

きには俺は宿の三階の一室の窓からぼんやりと月を眺めていた。

これで・・・良かつたのかかもしれない。

もしこの旅を続けていたら、ベルフェが死んでいた可能性だつてある。

俺はあの太陽みたいな笑顔を思い浮かべた。

どちらにせよ、俺は目的を達成すれば元の世界に帰らなくちゃいけないんだ。別れることになつていて。それが早まつただけのことさ。感情の部分ではまったく納得できていない。ベルフェと旅を続けたい。しかしそれではお互いのためにならないだろう。と理性がそれを押さえつける。

・・・もう寝るか。

俺はベットに入り、明かりを消した。

なんであんなに怒つてしまつたんだろう。

私は宿でクロスボウの手入れをしながら、罪悪感で胸がつぶれそうだった。

大切なことを、タイミングを見失つて言いそびれることだつてある。それがどうしてあの時分からなかつたのか。

あんな風に別れてしまつては、彼は私が怖氣づいたと思うだろう。そんなことは無い。危険な旅でも、彼と一緒にならきっと怖くない。でも、もう手遅れ。結局、長い間話していない「他人」に甘えたかつただけなのかもしない。

私は大きくため息をつくと、片づけを始めた。

・・・風が吹いている。

私ははつと、目を覚ました。いつの間にかベッドに突つ伏して寝てしまつていたらしい。

しかし室内なのに風が吹いていると言つのは……？

「あ、起きちまつたようですね。」

「かんけーねーだろ、早いとこ仕事するんだ。」

私は後ろの壁の窓を見上げた。

窓枠に2人の男が立っていた。

「お嬢ちゃん、怖い」としねえから、ちょっと一緒に来てくれないか。」

背の高いぼうが私に言つた。

「もし、断つたら？」

「こうする。」

男は右手の指を複雑に動かす。私も思わず目がいつてしまつ。そのまま・・・私の意識は深い闇へと沈んでいった。

「後はこの娘連れて帰還すりやいいんですね？」

「そうだ。俺はまだやることがあるから先に帰つてくれ。しかし、ベラドンナ様は何を考えていらっしゃるのやら・・・。」

2人の男はそのまま闇に溶け込むようにその場を去る。

この様子を見ていたのは、空に上がつていた月だけ。

しかしその月もやがて雲に覆われ、見えなくなつてしまつた。

朝起きてから俺は街をぶらぶらしていた。

宿屋の主人に聞いたところによると、こここの街は「エイム」といつて昔から魔法使いが魔術を学ぶために様々な地域からやつてくることで有名な都市らしい。高名な魔法使いを自負するものなら一度はここに来たことがある、というから驚きだ。

因みに五つの王国でそれぞれ主要な職業が決まつていて、アンドラスは戦士、セラティエルは魔導師（エイムもこの大陸にあるらしい）ニスロクは冒険者、マシユイトは狩人、タグリヌスは盗賊ということがどうだ。

盗賊が人気な職業というのも変な話だが、宿の親父はこの国だけは王家の力が弱く、「ブルー・ワイルドエンジェル」という盗賊団が事実上國を支配しているため、と言つていた。

これからどうしよう。

朝起きたばかりだから、あまり働かない頭を回転させる。

・・・そうだ、まず金を手にいれて宿代払わなければならんな。
方法はもう考えていた。五つの国は全て魔物に頭を悩ませている、
という話だから「魔物退治」の名目で王家にスポンサーになつても
らえればいい。そうすれば魔物殺しもスマーズにいつて一石二鳥だ。
俺は王城（幸いなことにエイムのすぐ近くにある）への道を急いだ。

定期的に体に伝わる振動。
私は目を見ました。

一瞬、宿の部屋かと思つたが、違つた。大きさは同じぐらいだが、バラが活けてある高そうな花瓶、見るからにふかふかなソファ、大理石のテーブルとまるで貴族の寝室と言つた感じだ。

私はどうしてこんなところにいるんだっけ……？

そこまで考えが至つた私ははつとしてドアへと飛びつく。

ドアには鍵が掛かっていた。

・・・私をどうするつもりなのかしら。

衣服に乱れは無い、ということは身代金目的の誘拐？見るからに旅人の私を誘拐するわけもない。

私は少しでも手がかりを見つけようと感覚を研ぎ澄ませた。そして・・・微かな揺れを感じ取つた。

船の上・・・ということ・・・？

少ない情報で考え続ける私の思考を、ノックの音が中断させた。

「陛下、麗しき」尊顔を押し光栄です。」

「そなたが魔物退治を生業としておるものか。それにしては随分と若く見えるが・・・？」

「14です。確かに陛下、魔物退治は多くの経験を積んでこそその職業ですが、私にはそれを補つてなお余りある才能がござります。」

「はつはつは、そこまで自信があるのかそなたは。」

王の間。両側には兵士（黒いローブを着ている魔導師が多い）がずらつと並び、すごい大風呂敷を広げる俺を呆れたような目で見ていた。ベルフェを襲つた兵士とは服装がかなり違つていたので、あいつらはゴロツキか他国の兵士だったのだろう。

そして肝心のセラティエル王は緑のローブだけで特に装飾品の類はつけていない、初老の男だった。王冠がなくて玉座に座つていなければ王と気づかないかもしないぐらい、その格好は質素だ。

「最近は新たな魔物が増えてきておる。その魔物を退治するには力

だけではなく臨機応変に対応しつる発想が必要であろうが、それがそなたにあるか？」

「無論です、陛下。」

「・・・・一つ試験を課そつ。これにクリアしたら資金を提供する。存分に魔物退治に専念してくれ。」

そこでセラティエル王は言葉を切り、2m程の杖で床をたたいた。「我に忠実なる下僕よ、今己の力を示さんとする若者に試練を与える。」

その言葉が終わると、俺の両側の床から2体の人形が沸いて出てきた。透明だからおそらくガラスか氷で出来ているのだらう。

「その人形を倒せ。それが試験だ。」

こんなところでやるんですか、と思つたがよくよく見回してみると兵士が後ろに下がったために十分な戦闘スペースが確保されていた。

「始めよ。」

その言葉と同時に、等身大の人形が殴りかかってきた。

「入つていいですかあー？」

身構える私が思わずへたり込んでしまいそうになる気の抜けた声。

「いいも何もないでしょう」

ぶつきら棒に答える私だが、相手はどうやらそれを肯定の返事と受け取つたらしい。

ドアを開けた。

第1印象・・・黒い。

その人物は私やイワキリさんと同年代ぐらいだらう、黒いドレスを着て緑の髪をツインテールにした、女の子だった。

端正に整つた顔立ちだったが、何か不吉なものを感じさせる違和感があつた。

一瞬後にそれが言葉になる。この少女は瞳が赤かつた。

魔物・・・?

「私はベルフュゴール、あなたは?」

「ベラドンナ。あなたをここに連れてきた人達の首領、といったところかしら。」

ますます魔物臭い。

「なぜこんなことを?」

「フフフ、ちょっととイワキリ君とお話したいと思つてね~、まあお友達のあなたから招待したわけよ。」

私をえさにおびき寄せようといつのか。

私は舌を噛み切ろうとした。

「!~、ちょ、何やつてるのよ!~」

不吉な少女も私の自傷行為には驚いたらしく、私を突き飛ばした。

「イワキリさんに迷惑かけるわけにはいかないわ。」

知り合つて一日そこらの人になぜそこまで出来るのか、私自身よく分からなかつた。でも氣づいたらそうしようとしていた。

「あらあら・・・・正直あなたにはあまり興味無かつたんだけど、あなたつて結構面白いわね~。でも・・・・ふと少女は真顔になつて言つた。

「あなたの命の価値はそんなもんじゃないでしょ?」

・・・・・

命の価値?

そんなこと、考えたことも無かつた。

「今イワキリ君を呼んでるから、ゆっくりしてつてね~。何か必要なものがあつたらドアの近くで大声出してもらえれば部下が持つてくれるから。じゃあね~。」

言いたいだけ言つと、少女はさつさとドアから出て行つてしまつた。私はソファに座つた。

ふと、取りとめもないことを考える。

私が死んだら、イワキリさんは悲しんでくれるかしら?

人形は強かつた。しかし俺はもつと強かつた。

格闘技のお手本のような突き、蹴りを繰り返す2体、互いに間違つてぶつかるなんてことは無い見事な連係プレー。

普通の人間なら避けられないような攻撃を、俺は刀を出さず体裁きだけでかわしている。

剣道部のエースとしても不自然なくらい完璧に対応しきる俺。

レリウーリアの言っていた俺の「才能」。

おそらく「視力」のことだろう。

俺の優れた静止視力と動体視力は、1km先の看板の文字を読んだり銃弾を見切つたりすることを可能にしていた。

無論、見切れるから体が反応できるというわけではない。しかし俺はこの異常な視力に対応できるように凄まじい筋トレーニングを重ねた。

俺は才能を「生かす」ことも知っていた。といふことだ。

今ではどんなスポーツでも花形。

（そして今も役に立つていて、と・・・）

俺は避け続けながらこの2体をどう倒すか思案した。

そして考えがまとまる、俺は2体から大きく間合いを取った。正直あんまりやりたくないのだが、背に腹は代えられない。

俺は刀を「背中から抜いた」

そう、王城に入つてから今まで、俺は刀を出したまま背中に紐で縛り付けておいたのだ。

出したり消したりできることを知らないようにするための小細工。しかし時に、小細工が大仕掛けよりも有効に働くことがある。

俺は2体に刀を投げつける。

ブームランのように回転しながら飛んでいく刀、人形は簡単にかわす。

そしてチャンスとばかりに近づくと「同時に」殴りかかろうとした。機会は一度きり、2体同時に倒さなければもうこの小細工は通用しなくなる。

今まで交互に連係プレーを行ってきた人形。そのままでは2体同時に倒すことが出来ない、故につくり出した見せかけの隙。

人形はそれに乗った。

射程に入った瞬間に、俺の手に戻った刀は2体の頭を粉々にした。さらに念を入れて胴もたたつ切る。

「そこまで」

王の言葉にそれまで騒然としていた兵士が静かになった。

「人形を同時に葬るその知略、まさかこれほどとはな・・・そなた、魔物退治もよいが我が軍の教練係にはなつてもらえぬか?あまりに、惜しい人材だ。」

あれ、刀が一瞬にして手に戻ったことにはツツ「ミニ無しですか。まあ魔法使いの国ではありますがあれ、刀が一瞬にして手に戻ったって俺読み書きできないしね」。

「身に余る光栄です、が、私は一介のハンターに過ぎません。私の能は魔物を狩ることだけですから。」

俺はやんわりと辞退した。

「そうか、それなら仕方ない。」

王は手を差し伸べると、空中から一枚の紙を取り出した。

「これがハンターの証明書だ。国内であればこれでどこへでも行けるぞ。」

「ありがたき幸せ。」

「・・・そういえばそなた、一人で狩りをしてあるのか?もしそうなら優秀な魔導師を1人つけてもよいが・・・」

これは破格の待遇だな。

俺は考えた。

國の人間がついているのは、正直あまり嬉しくない。國外に行くとき何かと邪魔になるからだ。しかしエウリノームのこともある。も

しかするとその優秀な魔導師っていうのが新しい仲間なのかも知らない。どちらにせよベルフェゴールの欠けた今、戦力はなるべく欲しい。

俺は肯定の返事を返した。

「ローブはあるか？」

「は、ただいま。」

よく響くバリトン。

ベージュ色のローブをまとつた男が前に出了た。

顔は・・・フードを被つているためよく見えない。

「そなたにハンター、『イワキリ』の補助を命ずる。」

「御意。」

男はフードを取つた。

・・・・・。

この世界には色々と驚かされてきた。

しかしどれもこの比ではない。

知的な風貌。常に周りの状況を正確に把握する冷徹な眼差し。

補助の魔導師は文芸愛好会会長、鬼怒川 龍一だつた。

第九話

城の門から出るまで、俺達は無言だった。

俺はあの顔を見たとき「部長」という言葉が喉まで出掛かった。が言わなかつた。

世の中には（「」は異世界ではあるが）同じ顔の人間が3人はいるつて言うし、今、ここで部長に会うなんてのはそれこそ南極でホツキヨクグマを見つけるに等しい確率だ。ありえない。

大体もし部長なら俺を見たときに何らかの反応を見せたはずだ。それに王は言つたじやないか「ローグはあるか？」つて。

以上の事実から俺はこの人物を部長とは別人と判断した。

「色々どご迷惑をお掛けするかもしれませんが、何とぞよろしくお願ひします。」

取り敢えず俺が口火を切つた。

「・・・・・」

部長似のこの男はじろつ、とこちらを一瞥するとまるで聞こえなかつたかのようにそのまま歩みを進めた。

「何か失礼なことを言つてしまつたんだろうか。

「あの・・・何か失礼なことを・・・」

「こういう時は直感を信じる。生半可な推測は間違つた判断を生む。

岩切君には私が鬼怒川龍一以外の誰かに見えるのか？」

「・・・マジで部長でしたか。

「いや・・・何と言いますか、こんな感じで会つうことになるなんて・・・」

「私も君見たとき驚いたよ。」

「ぜんつぜん驚いているよつには見えませんでしたが・・・

「先輩、仕官しているつてことは、ここでは長いんですか？」

「文芸愛好会の会合があつた日の帰路で『英雄ツアー』のパンフに吸い込まれた。ここでは3ヶ月つてところだな。君はいつ、ここに

来たんだい？」

「飲み込まれたのは同じ日です。ここではまだ一日しか過ごしてません。あ、後スタート地点は森でした。」

「そうか・・・一人でここまで来るのは大変だつたら?」

「いや、数時間後に森に住んでいる女の子に会つて、その案内で来たんです。」

ベルフェゴールの話はあんまりしたくなかった。どうしても彼女の輝く笑顔がまぶたの裏にちらついてしまう。

「ほう、それは奇遇だな。私はタグリヌスの砂漠からのスタートだつたが、私もそここの住人に助けられた。まるで運命の流れに乗せられているようだな。あのままなら私は餓死してた。」

部長はちょっと笑つた。たぶん冗談で言つたんだろうが、俺は「運命」という言葉にはつとなつた。

ありえない、と言つほどでもないが、ちょっと出来すぎてやいないだろうか?2人の異世界から来た男が、理想的とは言えない環境から冒険を始めて、程なくして住民に助けられるなんて、まるであらかじめそうなるように仕組まれていたみたいだ・・・

先輩の言葉が、俺を思考の海から引き上げる。

「私はツアーコンダクターを名乗る人物から魔物退治を命ぜられたが、君のミッションは?」

レリウーリアのことを言つているのだろう。

「同じです。武器を奪つてこいと。」

「なら都合がいいな。これから行動をともに出来る。君みたいに強い男と冒険できるとは心強いよ。」

先輩もおそらく俺の鬪いを後ろから見ていたのだろう。それは本心から出た言葉に違いない。

・・・しかし、どうもこの人の口から発せられると全部皮肉に聞こえてしまつ。

つぐづぐ損な人だ。

・・・いや、そう思つのは俺だけか?

「先輩は戦闘経験はありますか？」

「ライオンほどの大きさの魔物を3体、盗賊を1000人程叩きのめしたが、それだけだ。」

それだけって先輩・・・

つてか先輩魔導師じや無かつたんですか？

叩きのめしたつて、思いつきり物理攻撃じや・・・

「あの、失礼ですが、先輩はどんな魔法が使えるんですか？」

「さつき話した砂漠の住人が魔導師だったんでな、その人に弟子入りして本来3年で修める魔法の基礎を2ヶ月でマスターした。火、風、水、土の4大元素ならある程度使えるよ。」

3年掛かるところを2ヶ月。普通ならあり得ないが、俺は信じた。1日で200枚の原稿を仕上げるという偉業を成し遂げた部長の中力はある意味、俺の視力より驚異的だ。

先輩によると、魔法はこの4大元素に大分されるらしく、それを組み合わせて使うらしい。

また良くファンタジーにありがちな「魔法学校」みたいなものも無く、魔導師の家に住み込みで修行をするそうだ。そのため呪文を詠唱する、しないや魔方陣を使う、使わないなど数多くの流派があるとのことである。

う~む、強い。戦士とかと比べて魔法使い優遇されてるよこりや。

「魔導師はやっぱり、限られた人間しかなれないんですね？」

「そんなことは無いが、向き不向きはあるな。相当な努力と想像力が必要な職だから皆あんまり外に出ない。少なくとも運動好きにはなれないよ。」

運動好きにはなれない職、か、なるほど。となると身体能力は皆劣っているということか。

魔法だつて発動に数瞬の間が必要だろうし、俺が思ったよりは魔導師は強くないみたいだな。

「ま、私は例外だがな。本来魔法の練習に当てる時間を・・・」

そういうと部長は右手を前方に差し出す。

杖がその手に出現した。

長さは2mくらいだろうか。手首ぐらいの太さの鉄棒になにやらわからない文字が隙間無くびっしり刻まれた得物だった。

王の杖みたいに宝玉ははまつていな。

「魔導師の最大の弱点とも言える接近戦の練習に使つた。」「ビツと杖を振る。

剣道部のN.O.・Zとも言われたかつての部長の振りよりも、それは更に速かった。

これなら盗賊相手に肉弾戦でも引けを取らないだろう。

・・・もしかすると今の部長の実力なら俺に匹敵するかもしない。「それが『英雄の証』ですか？」

「そうだ。君の刀と同じく、出したり消したりできる。」「頼りにしますよ、先輩。」「そういう君も強いだろ？」「俺達は顔を見合させて少し笑つた。

「そいつ」が視界に入るまで、俺達は無言でエイムへの道を歩いていた。

「あれ、あの人何やつてんでしょうね？」

「む・・・邪魔だな、あの男。」

エイムへと通じる間道で、その男は立ちふさがっていた。

「イワキリさんで間違いありませんね？」

10mほど近づいたところで、男はいきなり声を掛けってきた。

そいつは灰色の上着に灰色のズボン、灰色のコートを羽織っていた。その顔からは表情が抜けきっている。おそらく人を傷つけても罪悪感を感じないタイプだろう。

正直に言つかちょっと迷つた後、俺は答える。

「まったくその通りだが、なんの用だらうか？」

「僕」の任務はイワキリという男を「船」へと導くこと。

初めベラドンナ様から聞いたときはそんなの連絡係にやらせりよ、と思つたがこうしてその人物を前にしてみて、俺のこの仕事に対する意識が変わつた。

その鋭い目は、直感と観察結果とを合わせて考慮し、正しい結論を出せるタイプの人間だと語つていた。並みの人間では例え切り札を持つていてもこの男を船へと引き込むことは出来ないだろう。警戒される。

だから「僕」が抜擢されたのだろう。

「ブルー・ワイルドエンジュル」交渉係のこの僕が。
しかし・・・隣の魔導師の男。

かつてタグリヌスの盜賊に「虐殺墮天使」と称された賞金稼ぎだ。

「僕」もこの男に両腕を叩き折られた。

向こうは気づいていないようだが・・・

どこに消えたのかと思つたら、セラティエルに仕えていたのか。この男が側にいるのは厄介だ。「ブルー・ワイルドエンジュル」の名前で脅迫することが出来ない。

引き離さなければ・・・

僕は「交渉」を開始する。

「あなたは確か、ベルフェゴールさんと仲が良いようですね。そんなあなたに伝えるのは心苦しい限りですが・・・」

「ベルフェゴールがどうしたっていうんだ?」

イワキリの顔が僅かに歪む。どうやら感情を隠すのはうまくないようだ。

「ちょっとまあ、我々の方で『お預かり』してるんですよ。無論お怪我の無いよう丁重に扱つてはおりますが・・・」

イワキリは手に刀を出現させると、無言で僕の喉に突きつけた。

「僕はあなたにこの事実を伝える伝言係であり、ベルフェゴールさ

んのいる場所まで案内する案内係です。僕を殺してもあなたにとつて得はありませんよ。僕の代わりなんていくらでもいますから、代わりがいるっていうのは嘘だけど。

僕はちよっと言葉を切り、続ける。

「あなたにお願いしたいのはほんの、少しばかりの『代金』です。そうすればベルフェゴールさんをお返します。」

僕はベラドンナ様愛用の水晶玉を取り出す。

それは空中に浮かぶと光を放ち、部屋に監禁されているベルフェゴールの様子を映し出す。

「この通り無事です。来ていただけませんか？」

「ここに連れてくるんだ。」

「それはできません。ベルフェゴールさんに途中で逃げられてしまつたら、信用していないあなたは僕達を殺すでしょう？あなた程強い方を、僕達の誰かがどうこうできるわけもありません。国の直属のハンターでしたら僕達の欲する『代金』なんてすぐに手に入れられるでしょう？あ、後お連れの方には申し訳ありませんが来るときはイワキリさん一人で、ということでお願いします。魔導師の方に攻撃されたらひとたまりもありませんから。さて、少し時間をとりましよう。よく考えてください。」

結果は見えているけどね。

なんてことだ・・・俺がついていれば・・・

俺は横にいる部長に事情を話す。

「なるほど・・・君が世話になつた女性が、別れた街で誘拐された、ということか。」

部長は唇を舐める。言つか言つまいか迷つているときの部長の癖だ。

「今から私はひどいことを言うが・・・どうか怒らないで聞いてほしい。その女性だが、「見捨てる」と言うのも一つの手だぞ。」

「え・・・

「我々の目的は魔物退治だ。戦力も2人で十分だろ?」

俺は思わず部長を睨みそうになり・・・こらえた。

あくまで部長は「選択肢」を提示しているに過ぎない。俺は観察眼には結構自信がある方だが、感情的でその目が曇ることが多い。その点部長は恐ろしく冷徹だ。感情の起伏が無いわけでは無いが、それが思考に結びつかない。自分の取りうる行動全てを冷静に分析し、いくつもの選択肢を導き出す。

・・・まあそれもキレてなれば、の話だが・・・

「・・・俺はその選択には反対です。ここで助けに行かなければ名折れです。」

「君ならそう言つと思つた。・・・もし本当に『見捨てる』って言つたらどうしようかと思つたよ。」

にやり、と笑う部長。

「無論、ただ敵の身代金の取引に応じるだけではつまらない。隙をついてその女性を助け出し、逃げる。そのつもりだろ?」

「いや、違います、先輩。」

俺もにやり、と笑う。

「逃げるのではなく、足腰立たなくなるまで叩きのめしてやります。」

「さて、時間です。そろそろようじいですか?」

「僕」は問いかける。

「行くよ。ただその前にいくら払えばいいのか教えてもらえるかな?」

僕は金額を告げる。それは本当に大した金額ではない。本来の目的ではないからだ。

「僕」はもう部屋の様子を映していない空中の水晶玉に告げる。

「水晶よ、己の片割れとの間に道を作り、僕と客人を通せ。」

水晶玉がさつきと同じように光り、ドアへと変わった。

「己をくぐれば僕達のアジトです。」

ベラドンナ様に目通り叶うとは幸せな奴だ。

俺は先輩に言った。

「エイムの街で待ち合わせましょう。」

「む、理解した。」

俺は敵地に赴くべく、刀を仕舞うと服装を整えた。
案内係に促され、俺はドアを抜けた。

頬に激しい風を受けている。

ベルフェゴールを誘拐した奴らのアジトは船の上だった。

大航海時代の海賊船のような、マニアが見たら喜びそうな外装だ。

俺はその甲板に立っている。

船の「下」を覗き込むと雲と砂漠の山が「眼下に」見えた。

・・・そり、こいつらのアジトはファンタジーにこれまた付き物の

「空飛ぶ船」だった。

航海技術発達してないんじゃなかつたんですかねこの世界は。

・・・あ「航空技術」だからいいのか。

とりあえずここから逃げるのは無理だと叫びしが判明した。

「ひちりへじうわ」

案内係が俺を呼び、船室への扉を指した。

俺は体に緊張をみなぎらせ、後をついて行つた。

「入るわよ~」

ソファに座り込んでいた私の耳に、ベラドンナのはしゃいだ声が響く。

ドアが勢いよく開かれ、嬉しそうな彼女の顔が覗く。

隣には緋色のジャケットをまとったショートカットの少女がぼんやり立っていた。

地味な顔立ちのせいいか、派手な格好をしているにも関わらず影が薄い印象を受ける。

彼女も誘拐グループの一員なのだろうか。

「ちょっとついてきて。あ、後念のために縛らせてもらひわよ~

・・・あれ?

私は体全体を見回した。

服の上から細いワイヤーが何重にも巻きつけられていた。
これでは腕を動かすことも出来ない。

私はショートカットの少女を見た。

彼女は我関せず、といった感じであらぬ方を見ていたが、私に巻きつけられたワイヤーの先は

彼女の手にしつかりと握られていた。

いつの間に・・・

確かに今、ベラドンナと話していく彼女への注意は逸れていたが、
こんな芸当が出来るなんて・・・
こんなのが後何人いるのかしら。

目下逃げる予定であつた私は、考えていたよりも難易度が格段に上
であつたという事実にげんなりしてしまつた。

非常に広い船内を、一味であらう乗組員がテキパキと動いている。
服装は統一されていないが、皆伊達好みのかかなり派手だつた。
俺と案内係が入つてくるや否や、働いていた船員は素早く通路の脇
に並んだ。

まさに一糸乱れぬ整列。

・・・こりや並の軍隊より規律正しいな。

通路の奥、明らかに他の船室とは違つた凝つた装飾の扉があつた。

「この奥に私達の首領とベルフェゴールさんがいます。」

この奥に、ベルフェゴールがいるのか・・・

あんな風に別れた俺を、どう思つているのだろう。

周りの誘拐グループなんかよりも、ずっとそっちの方が気がかりだ
つた。

「準備はよろしいですか?」

案内係が俺に声を掛ける。その顔は微笑していたが、俺にはそれが

本心から笑っているのではないということが分かった。

酷薄な笑み。

あのエウリノームの狂気的な笑顔とはまた違った意味で、それは俺の神経を逆なでした。

直感が、こいつは危険だと告げている。

・・・早く離れたいな。

俺のそんな気を知つてか知らずか、案内係は扉を開ける。

「ベラドンナ様、イワキリを連れて参りました。」

広い部屋の中には古風な木製の家具が配置され、向かって右手には大量の本を収めた本棚が並んでいた。

そして正面に、3人の少女が立っていた。

1人はベルフエゴール。俺を見て驚いたような顔をしている。

どうやらワイヤーで拘束されているようだ。

その先端は赤いジャケットの少女の手に握られている。その少女は、まるでこれから起ころる事は映画の中の出来事のように自分とは関係ない、といった態度で窓の外をぼけっと見ていた。
そして最後、黒いドレスの少女が俺に笑いかける。

「ようこそ、私達の船に。私の名前は・・・」

「興味無い早く用件を言え。」

俺は間髪入れずに口を挟む。じつにやり取りは相手のペースに乗せられたら負けだ。

しかし相手はまったく動じていなかつた。相変わらず微笑んでいる。
俺は続ける。

「身代金は俺をここに誘い込むための口実だ。本当の目的はそんなじやがない。俺じやなければならない何かだ。そつだろ?」

「さすがはセラティエル国王に認められたハンター。強いだけじゃなくて頭もよろしいようね。そつ。私の目的は全然違うわ。私の目的はね・・・」

そこで黒い少女は小首を傾げ、上目遣いで俺を見る。

その可愛らしい仕草に、思わず引き込まれてしまいそうになる。

「あなたに仲間になつてもう一つ事よ。」

「なんだと・・・？」

「私達、各所の遺跡を荒らしたり、お金が余っている王侯貴族からお小遣いを頂いてる『ブルー・ワイルドエンジール』って盗賊団なのよ。今では一国を治めるまでになつた。・・・でもそんな私達でも、魔物がはびこつている遺跡までは荒らせないの。でもそこには素晴らしい魔法の掛かった宝物があるはずなのよ。それで私、専門家であるハンターを探していたわけ。そしたら10日前に夢でお告げを聞いたの。『汝の欲する英雄は、セラティエルに現れるだろう』ってね。そんなわけであなたにたどり着いた。ね？仲間にならない？盗賊つて自由な職業よ。実入りも悪くないし、魔物の遺跡の魔具があれば、きっと5大陸だつて手に入るわ。』

「なるほどなるほど。それで人質とつて選択を迫つてているわけですか。さすがは盗賊というか、頭下げて頼むのが嫌いみたいだな。そんなお前達の仲間なんかには・・・」

そこまで言つと、だるそうな顔の赤い少女が初めて動いた。手に持つワイヤーの一本を強く引っ張る。

「痛つ！！」

ワイヤーと接しているベルフェゴールの右腕から血がにじみ出る。
「きちんと働いてくれたなら、もちろん解放してあげるわよ。でもそれまで彼女はわ・た・し・の・も・の」

黒い少女がベルフェゴールの髪を撫でながら歌つように言つた。

俺は理性を総動員して、刀でバラバラ死体にしてやりたい衝動を抑える。

どうすればいいか、と言つても今の選択肢は2つだけ。下僕になるかベルフェゴールの死か。

こんなの天秤に掛ける氣にすらならない。

「分かつた。分かつたよ。仲間に・・・」

「ならないで下さいイワキリさん！！あなたの口からそんな事聞くぐらいなら私は死にます。」

ベルフェゴールが叫んだ。

・・・もつと素直な子だと思ったんだけどね。

しかし俺もベルフェゴールの声で我に返る。

今黒い少女が意図せんとしているところはすなわち、俺の選択肢を狭めること。

そのために入質を取ったのだ。

だつたら人質を取り返せばいい。

・・・正直、今俺が考えている選択がベストだとは思えない。

しかしここで要求を呑むわけにはいかない。

そんな姿見たら自殺する、といつベルフェゴールの顔はマジだ。

人質を死なせるのは英雄のすることではない。

俺はいちかばちかに賭けた。

「つあああ！！」

叫びながら、俺は窓の外を指差した。

無論そこには何も無い。

しかし人間の心理と言つものは不思議なもので、誰もこんな状況でくだらない引っ掛けなんてやるとは思わないから、迫真の演技であればあるほど・・・

引っかかるてくれる。

案の定、部屋にいた俺を除く3人が、窓の方を見た。

その瞬間、俺は赤い少女に走り寄ると、思いつき突き飛ばした。

そしてワイヤーを巻かれたベルフェゴールを抱えて、部屋を走り去つた。

・・・・・

部屋の中を、沈黙が支配した。

といつても、ほんの数秒ではあつたが。

最初に沈黙を破つたのは灰色の青年だった。

「は、早く追いかけなければ！」

しかしベラドンナが遮つた。

「なんで急ぐ必要があるのかしら、どうせここは船の上よ。逃げようがないわ。」

「し・・・しかし、どこかに隠れられては・・・」

「この船のことを何一つ知らないあの2人が向かうのは、甲板ぐら
いしかないわ。おそらく、イワキリは死に物狂いで戦つつもり。2
人ともみんなを甲板に集めて。」

「は！？」

灰色の青年は答える。

赤い少女も無言で頷く。

ベラドンナは一人が出て行つたドアを見ながら考える。

正直、あんまり無益な殺生はしたくない。

しかしこの船の存在を広められるのは困る。

殺すしかない。

「断るなんて、思つてなかつたからね・・・」

英雄を自分の手に掛けなければならぬ不運を嘆きつつ、黒い少女
は緑の髪をかきあげた。

第十一話

船の甲板、船首付近にたどり着いた俺は一息ついてベルフェゴールを下ろす。

今まで抱き上げられていたためか、ベルフェゴールは顔を真っ赤にして俯いている。

「あの・・・イワキリさん・・・その、さつきは無茶言つてごめんなさい。私・・・恥ずかしいです。」

・・・顔赤くしてたのはそれが原因ですか。

俺は無言でワイヤーを取り去る。絡まっているところは無理やり刀で切断した。

そして深呼吸して、言った。

「よく聞いてくれベルフェ、知つてのとおりこの船は浮いている。」

「え！？そ、そなんですか！？」

下を覗き込んで驚きの声を上げるベルフェゴール。

・・・もしかして知らなかつた？

海だと思つてここから泳いで逃げるつもりだつたの彼女？

だからあんな強気な発言したのか・・・

そりや、何人いるかも分からぬ盗賊全員倒すよりそっちの方が楽だもんね」

「・・・まあ、そういうわけで、逃げられない。」

「じゃ、じゃあ・・・」

「そう、敵を全員倒して船を乗つ取るしかない。」

「私はどうすれば・・・」

「ベルフェ、君は俺を信頼してるかい？」

「そりゃもちろん。」

「ならここは俺に任せてくれ。後俺から離れるなよ。」

「・・・分かりました。」

一緒に戦えないのが不満な様子だったが、武器が無い以上彼女には

そうしてもううしがない。

「作戦会議はもうお終い？」

黒い少女の勝ち誇ったような声が響く。

見回すと今まで働いていた盗賊が、武器を片手に俺達を取り囲んでいた。

包囲網は距離にして約10m。

数は・・・300、といったところだらうか。

きついぜこれは。

俺は舌打ちした。

「さてと・・・何か言い残すことある?」

私は取り敢えず聞いた。

私は別に楽観主義者といつわけではないが、300対1ではどう考
えても勝つだらう。

魔物の巣窟に攻め入らないのは、力が無くて落とせないからではな
い。

あまり犠牲者を出したくないからだ。

盗賊と言うのは隙を突いて盗み出すのが本分。戦士のような戦闘屋
ではない。

といつても無論、見つかったら戦闘になるわけだからちゃんと訓練
はしている。

しかしそれは人間相手の訓練である。魔物と戦う訓練はしていない。
苦戦必須。

中には暗殺を得意とする戦闘に長けた「異能持ち」がいるのだが、
悲しいことに全員が対多数戦闘には不得手な能力だった。

隣の赤いジャケット着たソテツちゃんもそう。

ワイヤーを操る技術はほとんど神域に達しているが、突っ込んでい

くよつな戦闘スタイルではない。

と、私が思考していると、向こうから返答があった。

「もつとさ、面白いセリフ無いわけ？それじゃあ月並みすぎると思
うよ。うん。」

あくまでペースを崩さないか。

私は唇を吊り上げる。

「あなた達は絶望の淵に立たされているわ。例え私達全員を殺せた
ところで、決して逃げ切れない。さつきあなたがセラティエルに仕
官したのを、どうして私が知っていると思つ？」

そう問い合わせるとイワキリはほつとしたような表情になった。

そう、仕官の話は私が知りうるはずの無い情報。

それを私が知っている、といふのはつまり・・・

「王宮に内通者がいたのか・・・？」

「よくできました。私達盗賊団はあらゆるところに仲間がいるの。
いつかはあなた達を見つけ出して殺すわ。」

私は言葉を切り、続けた。

「今からでも遅くない。ベルフェゴールを差し出して私達の仲間に
なりなさい。」

もう、この男は断れない。

船を乗つ取つても逃げ切れないと分かれば、選択肢は一つしかない。

私はとつておきの笑顔を・・・向けようとした。

『あれ』がイワキリの背後の上空に浮かんでいるのを認めるまでは。
「そんなん・・・・どうして、どうしてこんな時に限つて・・・」

思わず呟いてしまう。

本当に、今だけは来て欲しくなかつた存在。

それが来てしまつた。

「なんだ・・・?どうしたんだ?」

今まで戦闘態勢を取つていた盗賊たちが突然動搖し出したからだ。

俺は後ろを振り返った。

「こここそ、という時に助けに来る・・・英雄の王道、というやつだな」

「なんで先輩がここにいるんですか・・・」

盗賊を動搖の原因は、俺の背後の空中に浮かんでいる部長だった。鉄の杖の上に乗つてサーファーの様に船に追いすがつていた。ベルフェゴールが事の展開についていけずに部長に問いかける。

「あ、あの、あなたは・・・?」

「話は後だ、とりあえずこの杖に飛び移れ。」

「わ、分かりました。」

「つ、あの男を殺りなさい!!--」

その言葉に我に返つた盗賊たちが、部長に向けて矢を放つたりナイフを投げつけたりした。

「邪魔だおめえらあひやひやひやひや」

戦闘状態といつ異常な心理の中で、部長も「凶暴」な一面を見せ始めた。

部長の目の前を横殴りの突風が吹いて、盗賊の攻撃を全て吹っ飛ばしてしまった。

「てめえら俺を殺そつするつて事はよ、自分の死ぬ覚悟もできてるつて事だよなああああ!」

部長は今まで自分の背後に回していた右手を掲げた。

その手にはバスケットボール程の火の玉が乗せられていた。

そして、盗賊の方に投げた。

「俺からのプレゼントだぜええええ!」

「・・・今後絶対に部長は敵に回さないようじょう。」

火球は拡散し、あわてふためく盗賊達を、まるで抱きしめるかのように包んだ。

「早く飛び移るんだ!」

その声に我に返り、ベルフェゴールを促して自分も杖に飛び乗る。3人を乗せた鉄杖は方向転換し、一気に戦場から離脱した。

「まつたく、最悪ね、ほんと、最悪。」

3人が飛び去った方角を見ながら、私はため息混じりに言った。
3人が視界から消えた時点で手下を包んでいた火炎は消失していた。

全員軽症。

無論そんな事じゃ私の心は晴れない。

さつき「逃げ切れない」と言つたのはハツタリ。仲間は各地に多くいるが、あの3人を相手に出来るのは正直少ない。
イワキリを動搖させて、仲間に引き込めるようにと言つただけ。
でもその小細工も「虐殺堕天使」の登場で無駄に終わつた。
「でも殺す、絶対に殺すわ。」

各地に散らばる密偵では殺せなくとも、暗殺専門の「異能持ち」なら殺せる。

この時点での「無益な殺生はしたくない」という甘い考えはどうかに消えていた。

目を付けた物は、手に入れるかぶつ壊す。
それが有益か無益かなんてことは関係ない。
引き込めないのなら殺すまで。

それによつて私のプライドは保たれる。

今鏡を見たら、きっと私の赤い瞳は怒りと期待で宝石のように輝いているだろう。

私の口元が自然と、綻んだ。

第十一話

俺達3人を乗せた鉄杖はしばらく飛行した後、ゆっくりと砂丘へ着陸した。

見渡す限り一面の砂漠。

部長のスタート地点がタグリヌスの砂漠だという話だから、ここがタグリヌス国なのだろうか？

部長が口を開いた。

「自己紹介がまだでしたね。セラティール国軍第三部隊所属、今はイワキリさんの補助を任せられているローグ・ベイモンと申します。以後お見知りおきを。」

ベルフェゴールに向かつて優雅に一礼する。偽名使ってんですか先輩。

「……それより部長。いくら俺達の関係を知られたくないからって、今までため口だったのにいきなり敬語じや怪しそぎですよ……」
案の定、ベルフェゴールはすぐに感づいた。

「あの、イワキリさんとは……？」

「え？ それは、まあ、主従関係……」

「先輩もういいですって。」

俺は先輩に言った。

そしてベルフェゴールに向き直る。

「ベルフェ、一緒に旅を続けてくれないか？」

唐突な質問に彼女は少し驚き、そして笑顔で答えた。

「もちろん、イワキリさんがそう望むのなら、喜んで。」

「そうか……。ベルフェ、今から俺は実に信じがたい話をするけど……」

「おいイワキリ……さん」

俺を止めようとする部長。

俺が何を話そうとしているのかに気づいたのだろう。

しかし俺の決意は揺るがない。

ここまで来て彼女を突き放すわけにはいかない。

・・・なんていうのはただの建前。本音は一緒に旅したい。それだけ。

でもま、理由はそれだけでいいだろ。言う必要性なんて考えるだけ馬鹿らしい。なんてつたって俺は直感で生きてきた人間なんだから。

「俺達は異世界・・・つまりここではない世界から来たんだ。」

「・・・え、そ、それは一体・・・?」

「こここの世界の魔物を倒すために、別世界から連れて来られた一般人つてわけよ。」

俺は話しつつ、ベルフェゴールを観察する。
その顔は困惑で塗られている。

「海の向こう・・・ってことですか？」

「いや、違う。ん~なんて言えばいいのかな・・・俺もうまく言えないんだけど・・・」

「じゃイワキリさんは魔物を退治するために天から遣わされた天使、つてことですか！？」

「いやいや、俺はそんな大層なもんじゃないんだよほんと。ただくじに当たつたつてのと同じ程度だから。」

「・・・でも、イワキリさんは天から見込まれたから魔物退治を使命されたんでしょう？」

「まあそれはそうなんだけね。俺達をここに来させた奴によると、魔物退治自体が目的つてわけじゃないみたいなんだ。あくまでそれは手段・・・」

ここで俺は言葉に詰まった。

魔物を退治することでその地に英雄伝説を残し、信仰の対象にされる・・・
はたしてそこまで言つていいものなのか。ベルフェゴールだつてこの世界の「住人」だ。

その「住人」に真の目的を話してしまったのは・・・

俺が迷つていると、部長が助け舟を出してくれた。

「まあ最終的な目的は我々の成長かな。魔物退治するという艱難辛苦を乗り越えられれば何かを得られる、ってね。そんな感じだ。」

さすがは部長というか、うまい誤魔化しだな。

ベルフェゴールは困惑していた顔に、今度は驚きと感動を浮かべうつとりとなっていた。

「そんな素晴らしい方たちと冒険できるなんて・・・私って本当に幸せですね。」

「そう言つていただけだとありがたい。」

部長も笑つて答えた。しかしふと真顔に戻る。

「さて、そういうわけで我々は魔物退治に行くわけなんだが・・・顔を伏せながら言つた。その表情はまるで皿洗いを手伝つていた子供が誤つて皿を割つてしまつたり、障子を破つてしまつた時に見せる表情だ。

普段の部長なら絶対見せない顔。

俺は不安になつて言つた。

「・・・何か問題があるんですか？」

「！」は盗賊共がはびこつているタグリヌス国だ。だからすぐにでも他国へ移動しなければならないのだが・・・不覚を取つた。」「怪我したんですか？」

そういうと部長はゆつたりとしたローブをまとつた左腕を上げた。肘辺りから先の布が垂れ下がつてしまつている。俺は数瞬後、事の大きさを知つて青くなつた。

「！－、ちょ、先輩、う・・・うで！」

「どうやら戦闘中に斬られてしまつたらしいな・・・一体誰が、どうやつたのか想像もつかん。」

「そんな事よりも先輩止血！」

「あわてるなイワキリ君。水系統の呪文で患部を凍らせているから止血は済んでいる。」

「あのローラーさん、これから片腕で冒険するつもりだったんですか・・？」

ショックから立ち直ったベルフェゴールが言った。

「そうですよ先輩、これから・・・どうするんですか？」「義手を作つて貰う。幸いあてはある。」

そう言うと不敵に笑つた。

つこわつき片腕を失つた人間が見せる顔ではなかつた。その豪胆さ、冷静さ。

部長とはもう2年間の付き合いになる。普段の学校生活でも決して甘く見ているつもりは無かつたが、この人物はそんな俺の認識を遙かに超えた傑物だつたようだ。

改めて部長を見直したところで、本人が「私の知り合いが近くに住んでいるんだ。」と言つた。

そして辺りを見回し、「確かにこの辺だつたと思つが・・・」と呟く。俺もつられて周囲を見る。

地平線近くの砂山の上、小屋がぽつんと建つてゐるのが見えた。

「先輩、小屋が見えますけど。」

「そこだ。そこに私に魔法を教えてくれた師匠が住んでる。あの人はならおそらく義手を作れるだろう。」

なるほど。確かに魔法の師匠って言つるのは何でも作れそうな感じではある。

小屋へと歩いていく最中、俺はずつと氣になつていていた事を部長に尋ねた。

「先輩、どうしてあそこが分かつたんですか？」

「君と灰色の奴が扉を通つたときだな・・・」そこまで言つと部長は顔をしかめた。左の傷口をしきりにさすつてゐるところを見るに、どうやら今になつて痛んできたりしい。

まあ腕を無くしたんだから、当たり前と言つちゃ当たり前だが。

「ちらつと見えたんだよ、砂山とあそこの小屋がね。だからあいつ

らがタグリヌスのこの辺りにいることが分かつた。別にそれだけなら君を追いかけたりせんのだが、あの灰色の男を見たときに誘拐した奴らが『ブルー・ワイルドエンジェル』だと分かつた。あの組織が身代金誘拐なんてちやちなことするはずがないから、何か裏があると思つて駆けつけたのさ。セラティエルとここは隣国だから距離的にも近かつたしね。」

まさに間一髪。と部長は笑つた。しかし額の冷や汗までは隠しきれない。

俺は痛みから氣を逸らすだけでも、と思い会話を続けた。

「先輩、随分詳しいですね。」

「あいつらの私を見つけた時の反応を見ただろう?修行時代・・・と言つてもほんの2ヶ月なんだが、私はアルバイトと魔法の試し打ちを兼ねて賞金稼ぎをやつっていたんだ。タグリヌスの盗賊を他の4国は良く思つていなかつたみたいでね、依頼には困らなかつたよ。そんなわけで仕事を重ねていくうちに『虐殺墮天使』だなんて通り名を貰つてしまつた。」

部長の呼吸が荒くなる。掌の汗が砂の上に落ちて、瞬く間に吸い込まれていく。

これ以上喋らせるのは逆効果、と思つた俺は船の上で起きたことを話すのを後回しにして、「もうすぐですから、頑張つてください」と声を掛けるに留まつた。

砂山の一軒家、入り口の扉に倒れこむようにして部長は気絶した。

夜も更けたころ、黒い少女と赤い少女が片や颯爽と、片やどほどほと、タグリヌス国の街道を歩いていた。

ベラドンナとソテツである。

「こ」の辺だつたかしら・・・?

他国とは比べるべくも無い狭い道。屋台が立ち並び、なけなしの金で安い杯を重ねた酔っ払いが千鳥足でふらついている。わき道にはぼろを纏つてうずくまつている人もちらほら。

それはホームレスと一言で表せないくらい悲惨な姿態であった。

「まったく、人生投げてるわね。」

彼女はため息をつき、遠くのタグリヌス城を眺めた。月の光を背に受けているその城は、一見すると童話に出でてくる西洋の城である。

しかし近寄れば、堀の水は緑色に濁つていて堀には草が生い茂つていることが分かる。

それは荒城。

栄華を極めたタグリヌス王家も落ぢるとここまで落ちたのだ。

その責任の一端を担つている彼女は少し憂鬱になつた。

「もう少し、もう少しでタグリヌス国を完全に我が手にできる。やうすればきっと・・・」

王家が栄えていたときだつて、いつも平民は苦しい生活を強いられていた。

だから私達盗賊団が支配すれば・・・

彼女の思考は、赤い少女に袖を引っ張られるごとにより中断せられた。

「ん? 何かしら?」

ソテツは黙つて路地の方を指差す。

そこは月の光が入らず、まるで地獄へと続いているかのように真つ

暗であつた。

「・・・・・」

数秒考え、ベラドンナはソテツが言わんとしていることを理解した。近道だ、と言いたいのだろう。

ベラドンナは象牙を削り込んだような、細く白い指を顎に当てる考えた。

因みに、そういうた無意識な仕草の一いつが様々な男を魅了することを彼女はよく分かつてゐる。

自分が美しいということを知つていて、そして美しさは武器になるということとも知つていた。

「まあ、近道と言つちゃ 近道だけビ・・・」

この道を通れば治安の悪い城下町のこと、暴漢に襲われるかもしれない。

・・・・・もちろん、戦つて負けることなんて有り得ないが、あまり体力の無駄遣いはしたくない。

さて回り道するのとこの道通ると、どっちが早く着くでしょう？
「折角言つてくれたんだから、通りましょうかね。」

その言葉を合図に、ソテツは歩き出す。

二人の少女は深い闇へと呑まれていった。

「つたぐ、入り口でぶつ倒れてるローグ見つけたときは驚いたね～。
いや、マジで。」

フランクな口調で俺に話しかける男は、みすぼらしい椅子に座り、みすぼらしい机に肘をついている。

それらの家具は、ベラドンナの部屋のようにアンティークな雰囲気を醸し出しているわけでもなく、家主にもつと丁寧に扱ってくれと非難の声をあげているように思える。

蠅燭の明かりでも分かるぐらいに汚い小窓から、月の光が床へ

と伸びていた。

周りの空間には、大量の本を詰め込んだ本棚がいくつも並んでいた。中の本のどれ一つとして埃を被つてないとこ見ると、どうやら全ての本を定期的に読み返しているらしい。ある意味すげい。

時は1時間前までさかのぼる。

俺は倒れた部長に驚いて名前を呼び掛けているうちに、ベルフェゴールが大声で家主を呼んだ。こいつは彼女は俺と違つて冷静である。

俺は最初、出てきた男が主人だと思えなかつた。

二十台中盤、といったところだろうか。

さらさらの黒髪。細めの目。額から左の口角にかけての大きな切り傷が目立つ。

見目美しいと言つても差し支えない顔立ちを、それが台無しにしていた。

白髪の好々爺を想像していた俺は、出てきたのが執事か用心棒だと勘違いした。

「あの、すいません、この人が・・・」

「おおっ、弟子じゃないか。」

その男は屈むと部長の顔を覗き、「間違いない。」と言つてうなづんと頷いた。

そして部長の左腕が無いことに気づいたのか、「これは大変だ。」

と明らかに本心から言つてなさそうな感じでセリフを吐いた。

そして腰に差していた杖を抜き、呪文の様なものを唱えると、部長の体をふわりと浮かせた。

「・・・・・」

俺とベルフェゴールがその家に上がつたのは、家主が完全に俺達のことを無視して部長を運んで家に入つてしまふからだった。

「おいおい、よもや聞こえていないのではあるまいな？」

「……え、あ、はい。」

放心状態だった俺は何にも聞こえてなかつたのだが、正直に答えても怒るだらうから嘘を言つた。

「……」

「……」

「やっぱり聞こえてなかつただろ？」

「……すんません」

今度から嘘はつかないようにしてよう。

「ん、何話してたんだっけ。あ、そうそう君と弟子との関係だ。弟子は確かセラティエルに仕官したとか話してたが、君も関係者かい？」

「えーと、俺魔物ハンターなんですよ。せんぱー・ローグさんと一緒に。」

俺は証明書をポケットから出して見せた。

「むむむ、なるほど。それで何があつたんだい？弟子の腕を取つてのは普通の魔物じゃ、ないね。まさかまさか、『五つの座』とかだつたりしちゃう？」

「なんですか、それ？」

家主の男は俺の返答に眉をひそめた。

「……君狩人だよね？もしかして知らない？ん、知らないの？」

今までの会話の流れから、この人物が使用人ではなく部長の師匠であることはおそらく間違いないが、一々勘に触る言い方である。

「何分、実力に知識が追いついていないといいますか、実戦ばかりだつたんで。」

男は俺の大風呂敷に不快な顔をするかと思いきや、「それはいけないね」と真面目な顔で言つて背後の本棚から一冊の本を抜き出してテーブルに置いた。

「読んでみたまえ。魔物に関する記述が詳しく載つてている。」

「あ、すいません、俺文盲でして……」

「おいおい良くなそれで専属ハンターになれたな・・・」

「情けないが、こればっかりはどうしようもない。」

「仕方ない、その記述を読んであげよう。」

男が喋るうと口を開いたとき、室内にベルフェゴールが入ってきた。

「ローラーさんは落ち着いたようです。今ベットで寝ています。」

喋るタイミングを失った男は開いた口から代わりにため息をついた。
「自家製の鎮静剤が効いたんだろう、とりあえず安心だ。あ、そういえば一人の名前をまだ聞いてなかつたね、良ければ教えてもらえるかな？」

「イワキリ・ツトムと言います。」

「ベルフェゴールです。お一人の狩のお手伝いをさせていただいています。」

男は咳払いをした後、自己紹介した。

「名はギドー。元セラティエル国魔法研究部門責任者にして、この砂漠の住人。世間に見限られた隠者さ。」

そう言って笑う彼の顔は蠟燭に照らされていて、最初の印象よりずっと老けて見えた。

時を同じくして、ベラドンナもまた自分の判断の甘さに自嘲気味に笑っていた。

「やつぱり、やめといた方が良かつたわね~」

今彼女を支配する感情は恐怖でも焦燥でもない。

やるせなさである。

前方には馬鹿っぽい顔をした兵隊崩れの男が3人、ベラドンナとソテツを見てにやにやしていた。

無論彼女は知る由もないが、この3人はセラティエルでベルフェゴールにからみ、イワキリの登場で尻尾を巻いて逃げ出した男達である

つた。

「お嬢さん方、夜はここいら辺は治安が悪いですぜ、明けるまで家に寄つてきませんかい？」

「勿論俺達やお嬢さん方には何もしませんぜ……たぶんね。」下品に笑う男達。隣を見ると早くもソテツがワイヤーを抜きかけていた。

「ここは私に任せなさい。」

ベラドンナが小声で耳打ちする。

そして男達を見据えた。

ソテツのワイヤーなら確実に始末できるが、それでは足りない。

軽く見られたツケはそんな軽くないのだ。

「すいませんが、そこを通じていただけませんか？私達急いでいるものですから。」

「だあかあらあ、ここいらへんは危ないから俺達の言つとおりにじつてーの」

リーダー格の男がベラドンナの肩に手をかけた。

彼女はその男に、優しく微笑む。

「喧嘩は、相手を見てから売ることね。」

「・・・え？」

男は異変に気づくのに多少の時間を要した。
程なくして、彼の顔は苦悶に歪んだ。

「あーすつきりした~」

晴れやかな笑顔とともに吐き出されるセリフ。彼女の周りには男達の死体が転がっている。

全員、苦しみに顔が捻じ曲がってしまっている。

しかし、男達の体には一切の外傷が無かつた。

男達の死因は窒息死だった。

そんな顔を眺めながら、ベラドンナは明るく笑う。

彼女自身も気づいてないが、深層心理のレベルで彼女はイワキリに

逃げられた鬱憤を晴らしたいと思つていたのだ。

そしてその笑顔のままソテツに問いかける。

「こんな社会の害悪でも、体は一人前にたんぱく質で構成されるのよね。」 こういう奴らって、魔物とか肉食獣に早いとこ食われちゃえればいいと常々思うんだけど、どう思つ? ソテツちゃん。」

問い合わせられた赤い少女は無表情のまま小首をかしげる。
分からぬ、というジェスチャーである。

ほんとに、この子が喋る所を見てみたい。

ベラドンナだけではなく、誰もこの赤い少女と話したことが無かつた。

それ以前に、この少女の声を聞いたものすらいなかつた。

「・・・ま、いいわ。早く行きましょ。」

ベラドンナは黒いカクテルドレスの埃を払うと、ソテツを促した。

「む? 」 ひは・・・?」

目を覚ますと、汚れがごびり付いた天井が見えた。

上半身を起こすと、自分がベッドに入っていることが分かつた。
そこは自分がよく見知った部屋だつた。

「師匠の家・・・か・・・」

そこまで考へると、睡眠から覚めた脳が本格的に始動し始めたのか、
家の玄関で苦痛のあまり倒れたことを思い出す。

「ベットに寝かされていた・・・あの時と同じシチュエーションだ
な。」

また、あの軽薄そうで実際は真面目な男に借りを作つてしまつたか。
外を見ると、月に煌々と照らされた砂漠の風景が目に入る。
時折風が吹き、空中を舞う砂が地に複雑な陰影を形作つていた。

ふと、今何時か気に掛かつた。

左腕を斬られた今、腕時計は手元に無い。

そして部屋にも時計が無かつた。

「ここで、義務教育の成果を發揮させてもいいつかな。」

私は再度月を見た。

三日月で地平線近く。方角は西だから、大体今は6時頃かな。
・・・・・あ。

ここは異世界だから月の出の時間は日によつてぱらばらなんだった。
と言つわけで時間は分からない。

「ふふふ・・・・ははははは。」

もうこの世界に何ヶ月もいるのに、忘れていたとは情けない。
まったくもつて情けない。

結局強がついていても、年相応に抜けていりといふことだ。
そんな自分がたまらなく可笑しかった。

私はひとしきり笑った後、自分の左腕が妙に重いことに気づいた。

「・・・・？」

私はもう消失しているはずの左腕を布団から引き抜いた。

「・・・・ほう、これは・・・・」

肘から先には義手が取り付けられていた。

メタリックな質感。左腕だけアニメのサイボーグみたいな感じだ。
試しに指を曲げ伸ばしてみようか。

「しゃきんしゃきーん、とな・・・・ふむ、いい感度だ。」

生身の右腕と同じように、その義手は滑らかに、じぐじく自然に動いた。

「どれくらいの力が出るかな？」

隣の机に食事が置かれていたので、お盆の上のリンクゴを持ち、力を
こめてみた。

「ぐしやり・・・・とね。」

リンクゴは私の手の中でバラバラになり、床に転がった。

申し分ない義手だが・・・・

「この義手で、剣道出来るかな・・・・？」

まだ帰れるかどうかすら分からないのに、私は一人、そんな事を考

えていた。

「やつとついたわね」
タグリヌス国裏街道の一角。刑務所のような近寄りがたさが滲み出る一軒家を、ベラドンナとソテツは見上げていた。
入り口のドアに掲げられている看板だけが、そこが酒場である事を示している。

バー「盗人の昼寝」

タグリヌス国で城の次に大きいこの建造物は、盗賊団「ブルー・ワイルドエンジェル」の隠れ家である。

ベラドンナは五大陸に散らばる団員を召集する時、ここを使っていた。
「ここに来るのも久しぶりね。ずーっと飛行船乗ってたし。」
彼女は故郷の家に帰ってきたような軽い足取りで中へと入つていった。

「盗人の昼寝」はマスターが神経質なためいつもピカピカということで有名で、他の国に負けていない唯一の飲食店だった。
無論客層はひどいが。

二人は酔っ払いに絡まれないよう視線を固定しながら、カウンターへと近づいた。

「こんばんは、マスター」

マスターと呼ばれた老いた小男は、一人をじろりと睨んだ。

「ここは子供のくるところじゃねえ。けえつてくんな！」

「『緑髪小悪魔が呼んでるぞ』」

酒場のマスターは、ベラドンナの不可解なセリフに何と答えるわけでもなく、他の店員に「しばらく抜けるぞ」と言つと、背後の酒蔵への階段を上つていった。

二人も後に続く。

かなり上まで続いている螺旋階段の途中でマスターは立ち止まり、

壁の燭台の一つを思いついた。

まるでそれがドアノブであるかのように。

するとレンガの壁が一つに割れ、奥へと続く通路が表れた。行き止まりのドアが燭台の明かりに照らされて、黒くぼんやりと光っている。

「お久しぶりです、ベラドンナ様。お会いできる日を心待ちにしておりました。」

マスターがそれまでの態度とは打って変わつて、深々と頭を下げた。「そんな大げさな、2年ぶりぐらいでしょ。」

「明日とも知れぬ寿命の私にとっては、一日千秋の想いでした。」心の底から嬉しそうに笑う彼の笑顔は、盗賊団のメンバーしか見ることが出来ない。

「ソテツも、久しぶりだな。調子はどうだ？」

呼びかけられた少女は、親指を上に向けてビシッと腕を伸ばした。

「ははは、そいつあ良かつた。」

「マスター、皆は来てる？」

「ええ。暗殺グループのメンバー全員が奥の部屋でベラドンナ様を待つております。もつとも・・・」彼はニガイ顔で続けた。

「酒盛りを始めてあるかもしれませんのが・・・」

「ふふふ、皆リラックスしてくれてるのね。」

奥の通路へと足を踏み入れながら、彼女は楽しそうに呟つた。

「おひ、弟子。気分はどうだ？」

私は居間へと入った途端、師匠に声を掛けられた。

「・・・悪くは、ありません。食事もちゃんと取れましたから。」

私は視線を合わせられない。

命の恩人にして魔法の師匠であるこの人に、また助けてもらつてしま

またのだ。

面白いというか、自分の無力をまざまざと見せつけられたような、胃がむかつく気分。

剣道の試合に負けたときでも、ここまで悔しいと思つたことは無かつた。

「ほんとに、すいません。義手まで作つてもらつて・・・」

「ん、まあ大変だったけど、可愛い弟子のためだ。私も一脱がせて貰つたよ。」

朗らかに笑う師匠。しかしひベルフューゴールとイワキリは困つたように顔を見合わせている。

仕草や表情から、私の負の感情に気づいたのだらう。

「・・・おいローグ！！」

「は、はい。なんですか？」

普段師匠は私のことを「弟子」と呼ぶ。名前（と言つても偽名だが）で言つ時は怒つているときだけだ。

それも、かなり。

「てめえ命の恩人に対してその態度はなんだ。ああ？。感謝しようと言つてるわけじゃないがそんな暗い顔される覚えは無いぜ。」

一泊入れて、師匠は続ける。

「お前が何考えてんだか、俺には良く分かる。大方情けないとこんな事考えてんだろ？別に

反省するのは悪くないがお前はただ、沈んでるだけだ。」

「そう、でしたね。すいません。腕を盗賊」ときに落とされたのが、しかし私には分かっていた。

悔しくて。」

「だったら強くなれ。一喜一憂している暇は無いぜ。」

客観的に聞けば、腕をなくした人間にこの激励は厳しすぎるだらう。現にイワキリとベルフェゴールは眉をひそめている。

しかし私には分かっていた。

「ええ、次は負けません。」

「そーだ、そのいきだぜ弟子。それに、人に頼ることは恥ずかしい

「ことじや あない。困つたとき助けてもらひえるよつて、いつも人を助けりや それでいいのさ。」

叱責を糧に出来る。師匠は私のことをやう思つて言つてくれているのだろう。

会話する相手によつて最適な話し方を選択する。それが師匠のスタイルだつた。

到底私には、真似できない。感情が雰囲氣に出てしまつてさえいる私には。

精進しなければならないな。

私は新しくなつた左腕で頭をかきながら「分かりました。」と明るく言つた。

「はやくこねーかな~」

誰ともなしに呴かれる声。

「盜人の昼寝」秘密の宴会室には中央にテーブルが置かれ、5人の男女が談笑しあつていた。

長い銀髪とあごひげをなびかせている翁。

窓枠に腰掛けている血色の悪い少年。

目元まで包帯をぐるぐるに巻いている男。

髪飾り、ドレス、ネックレスと全てが髑髏模様の麗人。

目深に紫のシルクハットを被つた巨漢。

盜賊団の暗殺グループ「ダイスの目」の構成員である。「ソテツはベラドンナ様と一緒に来るんだっけ?」

少年が翁に聞いた。

「そうじや。あの娘も、少しば話すようになつたかのう・・・?」

「そりや無理だ爺様。つてか、あいつ喋れないんじやないかな。あいつの声聞いたことある?」

「それは、ないな。」

「だろ？喋つてくれたらいい線いつてるんだけどな」「

「・・・・は？何がいい線行つておるんじゃ？」

「あいつ顔は地味だけど悪くないし、あのショートカットがすごい似合つてるんだよな」。ふふふ。会えるの楽しみだな」「

「私は、ベラドンナ様の方が良いと思うけどね・・・」

イヤリングをいじりながら、美女がポツリと言つた。

マントの少年が、ムキになつて突つかかつた。

「例えば？具体的な説明を要求する！」

「例えばって、全部よ。」

「あら、それは嬉しいわね~」

部屋の中の誰のものでもない、よく通る声が返答した。

美女が振り返つた。

ドアに触れることなく部屋に入れる人物。

その容姿とカリスマ性で、10代にして盗賊団をまとめ上げる天才。

ベラドンナが、壁に寄りかかつて微笑んでいた。

第十五話

「ベラドンナ様！」

「皆集まつてくれたわね。」

答えるのとほぼ同時に、ソテツがドアを開けて入ってきた。

ベラドンナと「ダイスの目」。

盗賊団旗揚げ時のメンバーが、一堂に会した。

「ベラドンナ様、今回の仕事は・・・？」

ベラドンナを除くその場にいた全員が抱いていた疑問を、銀髪の老人が口にした。

盗賊団直属の暗殺グループ。

タグリヌス国の諸侯を震撼させたこのチームは、他の四力国が都市伝説ではないかと疑うほど、その存在が隠されてきた。よつて構成員が一人以上同じ任務につくことは珍しく、ましてや全員集まるなど皆無だった。

これが意味するのは、この任務が総力を尽くさなければ遂行できな
い困難な物だということだ。

「今回のターゲットは・・・」

ベラドンナが大きく手を広げ田を閉じた。

すると彼女の影が大きく揺らぎ、まるで実体を持つているかのよう
にゆっくりと立ち上がった。

影の柱はしばらく波打っていたが、やがて3体の人型を作った。
イワキリ、ベルフェゴール、鬼怒川の3人の姿である。

産毛から爪の先まで、黒一色でなければ見分けがつかないくらい精
巧であった。

ベラドンナの「異能」

それは影を操る術である。

能力の及ぶ範囲内であれば、そつくりの人型を作り出すことから大人三人を一度に絞め殺すことまで、ほぼ自在に操作できた。

「虐殺墮天使、ですか。して他の者達は・・・？」

「セラティエル直属のハンター。魔物の巣窟を攻略するのを手伝わそうと思ったら拒否してしかも飛行船まで見られちゃったから、消さなくちゃいけないと思ってね。」

「随分と若いですね。」

「ってか3人ともガキじゃん。虐殺墮天使はまだいにしても、セラティエル国つて意外と人材不足なんだな。」

青白い少年が、自分も他人をガキと呼べるような歳ではないことを棚に上げて言った。

「ペヨー！ 口を挟むな。」

「へーへ。分かりましたよ爺様。」

仕切り直し、と言わんばかりに咳払いをして老人は続けた。

「しかしベラドンナ様。セラティエル国専属ともなれば、殺せば向こうも黙つてはありますまい。」のじ命令はいかがなものかと・・・

「なに言つてんだじじい。だから俺らが『氣づかれないように』殺すんだろうが。死因を偽装するなんて、そんなの簡単だろ？」

包帯を巻いた男が、自分の足に乗つた刀を撫でながら言った。

「・・・む、確かに。今のは失言であつたな。申し訳ありません、ベラドンナ様。」

「気にしないで。それに万が一、ブルーワイルドエンジェルの仕業だと分かつてもあの国の弱みは握つていいから、クレイムルに交渉を任せれば大丈夫よ。」

「・・・分かりました。この3人を見つけ出して殺せば良いのですね？」

「そ。あんまり認めたくないけど、こいつら結構強いからがんばってね～。」

自分の主が強いと言うからには相当な実力を持っているのだろう。

全員がかつてない難易度の任務に身も心も緊張させた・・・約一
名を除いて。

「ベラドンナ様、俺はこの任務受けらんねえ。」

青白い少年が頬をかきながら言った。

そしてベラドンナが口を開く前に、彼の耳すれすれのところにフォ
ークが突き刺さった。

彼女がやつたのではない。包帯男が投げたのだ。

「ペヨーテよお、おめー何様のつもりだ？ 主の命令には絶対服従だ
ろうがボケエ！」

顔の下半分しか露出していないにも関わらず、その表情からは凄ま
じい怒りがほとばしっているのが分かる。

しかし少年、ペヨーテは慌てず騒がず、こうなることを予測してい
たように落ち着いた口調で言った。

「主の命令が大切なことは俺だって分かっている。だが俺には『女
を殺さない』という信念がある。信念を無くしたら人は人でなくな
る。だから俺は受けられないと言つたんだ。」

「それが分かつてないってことなんだよ！ そんな信念なんて捨てろ
！」

その言葉がペヨーテに届いた途端、彼の雰囲気から柔軟なものが消
し飛んだ。

「お前ちょっと血の氣が多いんじゃないかコブラ？ 一度『枯れて』
みなよ。」

そう言って腰掛けていた窓から、外へと右手を伸ばした途端、闇夜
を無数の羽音が埋め尽くした。

鳥でも虫でもない。

彼の右手に集まってきたのは『吸血コウモリ』だった。

包帯男・コブラはその様子を「耳」で感じ取り、足元に置いてある
刀を抜いた。

室内灯に照らされた刀身は純白で、あたかも鮮血で染められるのを
待ち望んでいるかのようだった。

「その小汚ねえペツトちゃん達に、お前の血を吸わせたら喜ぶんじやねえのか？」

ペヨーテは答えない。

双方ともに裂帛の気合をもって、相手を威圧していた。

その緊張感が体を突き動かす寸前、ベラドンナが割つて入った。

「ほらほら、二人とも喧嘩しないの。」

その雰囲気は到底喧嘩と呼べるようなレベルではなかつたが、二人にはその一言で十分だつた。

ペヨーテはコウモリを闇夜へと解き放ち、コブラは刀を鞘に納めた。

「失礼しました、ベラドンナ様」

同時に発せられる声。

「ペヨーテ、あなたの信念に反すると言つのなら、男一人だけでもいいわ。任務、受けてくれないかしら。」

「分かりました。」

ペヨーテはおとなしく引き下がつた。

「さて、皆早速取り掛かつて頂戴、と言いたいところだけど、ソテツから皆にお土産があるわよ~」

声も発さない無愛想な娘がお土産？

全員が興味津々といった様子で彼女を見つめた。

視線の浴びたソテツは、無造作に上着の内ポケットから『左腕』を机に投げ出した。

「・・・・・」

いくら人の死を見慣れている人間でも、いきなり仲間から土産だと言つて腕を出されたら反応に困つてもおかしくないだろう。

「ソテツ・・・それは誰の腕だ？」

一番最初に硬化から解けたシルクハットの男が、返事をもらえないことも忘れて言つた。

当然彼女は答えない。

しかしその代わりに、投げ出された左腕の手首を目に見えるようこの掲げた。

「・・・あ、その機械は・・・！」

左腕には腕時計が巻かれていた。レバーレンスはないその便利な道具。そして下級盜賊達に恐れられている人物の象徴。

「それ・・・虐殺墮天使の腕か・・・・・？」

「こくこくとうなずくソテツ。」

「お前が・・・やつたのか？」

同意の仕草を示す彼女。

「すごい・・・すごいぞ！これはすごい。」

シルクハットの男は腕を抱えると、頬ずりせんばかりにそれを撫で回した。

「素晴らしい・・・腕だけなのに強力な魔力が感じられる。これを『材料』とすれば最高の人形ができるぞ！」

「お土産」に感動して狂喜乱舞している男以外は、皆全く同じ感情を抱いていた。

「なかなかやるじゃない。ソテツ。」

「そうだな・・・俺もがんばんなきや。」

「喧嘩なんかしてると場合じゃねーな。」

「わしも負けておれんわい。」

腕のお土産。それはシルクハットの男の材料として使われるだけではなく、しばらく顔を合わせることのなかつたメンバーを、「負けられない」という感情でつなぎ合わせるのに一役買ったのだった。そしてベラドンナが高らかに言った。

「さあ、宴を始めましょう。鮮やかで美しく、そしてとびっきり『血なまぐさ』『宴をねー』

「準備はいいか？イワキリ君」

「あい大丈夫です。」

先輩の左腕が代わつてから3日目。部長が全快したので俺達3人はギドー氏の家を後にすることにした。

「おい弟子、『あれ』いるだろ？ 玄関に運んでおいてくれないか？」

「『あれ』・・・ああ、はい。分かりました。」

「後ベルフェゴール君はどこにいるか分かるか？」

「へ？ 部屋で荷造りしていると思いますけど。」「

「分かった。」

部長が玄関の方に消えたのを確認してから、ギドー氏が小声で言つた。

「・・・さて、イワキリ君。ちょっと来てくれか。」

そして家の裏手、倉庫の方へ歩いていった。

俺はそんなギドー氏に内心で首を傾げた。

部長に言えない何か、か？・・・

あの師弟関係からしてそれは無さそうだが・・・

考えながら俺も後に続く。

倉庫の入り口で、ギドー氏は振り返つた。

「君に言いたいことがある。他でもない弟子のことなんだが・・・

「ローグさんがどうかしたんですか？」

「彼、少し二重人格っぽいところがあるんだが、気づいているかい？」

「えーっと・・・」

表面的には、部長と俺とはあくまで仕事上のパートナーでしかない。

となると「知らない」と答えるのが自然なのかもしれない。

しかし相手はあの部長の師匠だ。すぐに見破られそうな気がする。

ここは正直に答えるべきだろうか・・・？

「・・・まあ、心当たりは・・・」

「だらうつ・まあ人間というのは多かれ少なかれ二面性を持っているのだが、彼の場合はそれだけじゃ片付けられないんだ。」

一息ついて、ギドー氏は続ける。

「魔法を教えていたときに気づいたんだが、戦闘中みたいな常とは違う心理状態のとき、彼の魔力が飛躍的に上がる時があるんだ。」

「……え？ 僕魔法のことって良く知らないけど、それって普通じゃないですか？ 『火事場の馬鹿力』的なものが働くんじゃないや……」

ギドー氏はため息をつかんばかりに呆れた顔をした。

「……君、アンドラス国の大筋馬鹿みたいな」と言つね・・・
「の、筋・・・」

「ま、いいや。あのね、魔法の原動力となる精神力つていうのは状況や環境で大きく変化すると思われているけど、違うんだ。本当は肉体以上に融通が利かないものでね、常に鍛錬を怠らず徐々に力を上げていくしかないんだ。そのかわり、肉体のようにトレーニングを持続しなくても衰えたりはしない。が、弟子の場合は精神力の上限が激しく変動するんだよ。こんなことは普通有り得ない。」

「……だから『違う人格を持っている』とでも考えないと説明がつかない。ってことですか？」

「私のセラティエル国での経験と独自の研究の成果を照らし合させて、それしかない。」

「分かりました。でも、それと俺と、どういつ関係があるんですか？」

「君と弟子はただの仕事上の仲間、というわけではないだろう？ 友人とか、深い関係であるはずだ。」

「俺は息を呑んだ。この男の洞察力はあの部長を超えているだろう。
「……なんで分かつたんですね？」

「決定的だったのは彼がここに君達を連れてきたことかな。あいつは自分が信用している相手以外は自分との間に『壁』を作つて接するから、もし君たちが浅い関係なら、まずセラティエル国に連絡とつて後続の魔導師を頼んで君との関係を絶つてから、ここに来たらうな。そういうわけで弟子の面倒をよろしく頼む。特に二重人格のところとか、ね。彼は強いやうで意外と・・・弱い。」

俺にとつての部長は完璧主義な畏怖すべき人物でしかなかつたが、よくよく考えれば俺達は剣道部と文芸愛好会を掛け持ちしていたから、顔を合わせる機会が多かつた。

部長が俺のことを『信頼できる』と思つてくれているのなら、それに応えない道理はない。

「やれる限りやつてみます。」

「頼むぞ。」

そう言つたギードー氏は、まるで面倒見の良い父親のようだつた。

第十六話

-五つの座の伝説 -

かつて「レバーレンス」は一つの大陸として存在し、レバーレンス王家が支配していた。

絶大な権力の元、戦は起きず、庶民は平和な生活を享受していた。しかしレバーレンス暦113年、転機が訪れる。

7代目レオナール・レバーレンスの子供である5人の兄弟が王位継承の座を奪いあつたのだ。

長男は言う。

「年上である私が、世界の民を正しき方向へと導くに足る。」

次男は言う。

「英知に長けた私が、世界の民に更なる繁栄をもたらすに足る。」

三男は言う。

「全てにおいて偽らない私が、世界の民の信仰心を養うに足る。」

四男は言う。

「勇猛たる私が、世界の民の安寧を守るに足る。」

五男は言う。

「何も語るまい。凡人たる私の兄弟と比べれば、王は私をおいて他にいない。」

王族、諸侯は五つに割れ、王座を巡つて戦いの日々を送るようになつた。

世は乱れに乱れ、荒廃の一途を辿つた。

神はこの様子を嘆き、五人の兄弟に呪いをかけ、人間であることをやめさせたのであった。

神は言う。

「団結を知らぬ人間が、人の世を治めるには足らぬ。」

後には旗頭を無くした配下が残され、戦は自然消滅。話し合いの結果、国は五つに分断されることとなつた。

「この様子を見た兄弟は口々に叫んだ。

「皆、忠誠を私に誓うと言つたではないか！」

人でなくなつた途端、その誓いは砂のように崩れ去つたのだ。やがて魔物となつた兄弟を退治するお触れが、各国で出された。兄弟の怒りは頂点に達した。

その怨念は大陸を五つに割り、その怨恨は民に災厄をもたらし、その執念は魔物となつた兄弟達に超常の力を与えた。

そして兄弟はそれぞれの大陸で復讐を果たすべく、今度こそ血刃に忠実な魔物を作り出し、民を苦しめているのである。

「それが五つの座……ですか。」

「あくまで伝説だ。だが各国に魔物の首領がいるといつのはほぼ間違いないみたいだな。」

「それをこれから狩る……と」

「そうなるな」

「……無理じや」

「馬鹿言つてんじゃねえぞイワキリ！俺らはこいつらブチ殺さないと元の世界に帰れねえんだぞ！？最初から諦めてどうすんだこのアホが！」

「……すんません。」

ちらりと横目でベルフェゴールを見ると、部長の変貌に驚くことも無く、ギドー氏に借りたらしい「レバーレンス毒物百科」という本を読みふけつてゐる。

どうやら自分の世界に没頭すると周りが見えなくなるタイプらしい。時々浮かべる怪しげな笑みも彼女の魅力を引き立ててはいるが、正直怖い。

俺達はとりあえずセラティエル国に戻ろうと、タグリヌス国の港「ネレイド」に向かうため、延々と続く砂漠を歩いていた。

「先輩・・・本当に無理なんですか？」

砂漠は熱されやすく冷めやすい。

俺は額に滴る汗を拳で拭った。

「何度も言わせないでくれ。私の飛行術は3人一度に飛ばすことは出来ない。せいぜいパラシュートみたいにゆっくり下降するぐらいだ。それに師匠の『結界』がある以上徒步の方が安全だ。」

ギドー氏は「研究を邪魔されないように」という理由で広大な砂漠に魔法をかけ、砂漠を歩く者が『見られたくない』と願う限り発見されないようになっていた。

虐殺堕天使と呼ばれた先輩が、今まで盗賊に見つかなかったのはここに理由があるらしい。

「う~そうですか。」

安全も何も現在進行形で水なくて死にそただけどね。よし、ここは気を紛らわせることにしよう。

「先輩、タグリヌスには悪名高き盗賊はたくさんいますけど、魔物はどうなんですか？」

「まったく見ない。私が倒したのもセラティエル国でだしな。」「ほんとですか!?」

「治安が悪いことも災いしてか『魔物も寄らぬタグリヌス』と言われているみたいだ。」

それは・・・いや、変だ。

レリウーリアは「五匹魔物を倒せ」と言つたわけではない。「5つの大国に潜む魔物を倒せ」だ。だから最低一匹はいないとおかしい。まあもつと厳密に言つてしまえば「五つの座」が倒すべき魔物ではない、という可能性もあるがそこは深く考えないようにしよう。考
えても無駄だ。

「さて、今度は盗賊団どもについて私の知つてゐる情報を教えてあ

げよう。いざれ戦うことになるしな。」

「え？ 本当ですか？」

ベルフェゴールが顔を上げる。「この子は聞いてないようでちゃんと聞いているらしい。

「私はてっきり、イワキリさんを放つておくものだと思つていましたが・・・」

俺と同じ意見を言つベルフェゴール。

ブルーワイルドエンジェルもそんなに暇じゃないはずだ。ベラドンナの目的が魔物の巣窟荒らしであるなら、マシユイト国にでも行つて狩人を引っこ抜いてくりやい。

そんな俺らに対し、いやいやいと苦笑する部長。

「理屈で言えばそうなる、が、あの女は理屈で動いていないんだよ。いわゆる物欲の権化と言う奴かな。自分の持ち物を大切にして、欲しいと思ったものは自分の物にするかこの世から抹消するか、といった感じだ。実際ベラドンナの私物を盗もうとしたり、盗賊団から抜けようとして死んだ人間が何人もいる。」

それにだ、と部長は人差し指を立てる。

「あいつは夢で啓示を受けたそうだな。だから余計私達の存在が大切に思えるのだろう。殺す動機を確固たるものにするにはこれで十分だ。」

「・・・なんか、怖いですね。」

この暑いのにブルツと震えるベルフェゴール。流れるような黒髪が風にたなびく。

そんな姿がたまらなく可愛く、思わず抱きしめてしまいたくなる。

「さて、そこで重要なのが盗賊団専属の『ダイスの目』と呼ばれる暗殺部隊の存在だ。私達の戦闘力に匹敵するのはそいつらとベラドンナぐらいしかいない。後は何人集まつても同じ雑魚だ。」

「暗殺部隊ですか・・・」

伝説の魔物に殺人集団、全く泣きたくなつてくれる。

「メンバーは6名。能力は私も知らないが、おそらくタイムマンに真

価を発揮するかこつそり殺すのに適しているかのどちらがだれつ。

そつじやなきや魔物の巣窟襲つてゐるはずだからな。」

「どひにあるのか分かつてないから襲つてないだけ、とは限りませ

んか?」

「有り得なくはないが・・・ベラドンナは君に『魔物を狩れ』と言つたんだろう?普通場所が分からなければ探しと言つと思つんだ。だから私は場所を大体把握していると考えた。」

部長の分析能力には全く頭が下がる。

「もう一つ分かることは、そのグループが『魔導師』『魔具使い』『妖術師』で構成されているといつゝとかな。」

何?それって全部違うの?

「と言つてもイワキリ君は分からぬだらうから、ちゃんと説明しておひづ。」

そこで言葉を切ると、杖を出してぶつぶつ呟いた。

何が始まるのかと期待していたら、部長は魔法で水を出して喉を潤しただけだった。

「・・・先輩水出せるんですか

「そりやそりや、そつじやなきやこんな砂漠越えられるわけがない。

」

「・・・あの、俺にも

「いよいよバくなつたらちやんと飲ませてあげるよ。それまで我慢だ。」

鬼だねこの人。

「ベルフェゴールさんは飲む?」

ますます酷い。

「いえ、イワキリさんが飲まないんだつたら私も我慢します。」

再び本の世界に入つていたベルフェゴールは顔を伏せたまま返事した。

よく言つた、それでこそ俺のベルフェゴール!

・・・ただ単に本読むの邪魔されたくなつただけかもしけないけ

ど。

「む・・・そうか。」

結局飲んだのは一人だけだった、という気まずさからか、部長はわざとらしい咳払いをして話を続けた。

「まず魔導師。これは私や師匠を想像してもらえれば分かりやすいだろう。精神力を鍛えて四大元素操る術者だ。色々組み合わせることによってバリエーションが増えるが、魔力が尽きたら自然回復するのを待たなければならないからあまり持久力がない。4つの元素全てを使いこなすのも難しい。」

「次に魔具使い。彼らは魔導師のような修行をすることなく、魔法の掛かった道具『魔具』を用いて超常の力を振るう。彼ら自身の精神力は関係ないから魔導師と違つて能力が持続するのが最大の特徴だが、その代わりレパートリーに欠け、一度ネタがバレれば確実に対策が練られてしまう弱みがある。あ、あと魔具と呼ばれるものは大体意思を持つから、道具に選ばれなければならない。」

「最後に妖術師。生まれつき四大元素に縛られないような超能力を持つた人間だ。おそらく魔導師と同じで精神力を消費するのだろうが、正直こいつらに関しては良く分からない。あまりに数が少ないからな。」

なるほどなるほど。

要するに・・・めんどくさい相手だということだ。そういう奴らと戦うぐらいならどう考へてもベラドンナに協力する方が簡単である。思わずため息をついてしまう俺。英雄らしい行動を取らなければならぬという制約が無く、ベルフェゴールが止めていなければ正直そつちを選んでいただろう。

まあ今から考へても遅い・・・か。盗賊団は俺らを殺そうとしている。もう後には引けない。

待てよ、そういえば・・・

「先輩、砂漠の上に港があるんですか？」

「いや、砂漠の終わりから5分くらい歩いたところにあるが。」

「・・・え、じゃあギドーさんの魔法、効かないじゃないですか」

「うむ、効かないな。」

効かないって先輩・・・

港といえば人がたくさんいるに決まっている。
そんなところを突つ切るのは見つかってくださいと言つてゐるような
ものだ。

それは無謀を通り越して自殺行為。

ベルフェゴールも怪訝な顔をして部長の顔を見つめている。

「先輩、・・・それは無茶ですよ。向こうは俺達の事血眼で捜して
るんですよ! ?」

「いや、あの港に限つては大丈夫。盜賊団もあそこを利用することは
思わないさ。」

自信ありげな部長の顔。

俺は考えてみた。

「あの港に限つて」他の港だと駄目。それはつまり船舶による渡航
自体が安全、というわけではないということだ。

次に浮上してくるのは先輩、あるいはセラティエル国のかかつ
た港である可能性。しかしこれは「盜賊団もあそこを利用するとは
思わないさ。」と矛盾しているから駄目。盜賊団は真っ先にそうい
つた港に目を付けるはずだ。

となると・・・

「・・・そんな難しい顔して考えなくとも、聞けば理由くらい教え
るよ?」

俺の様子を見かねた部長が声をかけてくる。

・・・む、なんか負けたみたいで悔しいな。
しかし好奇心が勝つた。

「教えてください。」

「さつき『タグリヌスでは魔物を見ない』と言つたが、実は予想は
ついているんだ。レリウーリアの言葉をよくよく考えたら、分かっ
たんだよ。居所がね。」

5つの国に潜む・・・

「・・・そう、か。国にいても大陸にはいない、つまり魔物は海か
空に・・・」

「その通りだ。後者の空は探索済みだから残るは海しかない。とい
うわけで調べてみたら、興味深い情報が入手出来た。」

漁師から聞いた話しなんだけどね、と部長は続ける。

「ネレイド港はタグリヌス国の全盛期、だから今から100年くら
い前かな、その時期に出来た港で当時は活気があつたらしいんだが、
ある時を境にネレイドから出航した船が目的地に着かず行方不明に
なるようになつた。漁船も貿易船も、事件を調査させるために派遣
した軍艦も一つ残らず、だ。それ以来ネレイド港とその近く一帯の
海には誰も近づかなくなつたんだよ。だから私はそこが怪しいと思
つていいるんだ。」

なーるほど。だから盗賊達も俺達が使うとは思わない・・・とい
ふことか?」

「・・・裏の裏まで考えて、その港で待ち伏せしているかもしれま
せんよ?」

「万一一、イワキリ君の言つ通りだつたとしても向こつは邪魔しない
だろ?。なぜならあいつらの目的は、あくまで俺達を『この世から
消す』ということだからだ。『自分の手で殺すこと』じゃない。
つまり向こうにしてみれば俺達がネレイド港から出航して勝手に死
んでくれればそれでOKなんだよ。セラティエルとの関係を悪化さ
せずに私達を消せればそれに越したことはないからね。対して私達
はいつかは魔物を殺さなくちゃいけないからネレイド一帯の海を探
さなくちゃいけない。」

最も船消滅の事件が、魔物の仕業ではないといつ可能性もあるけど
ね。

そつ言つて部長は話を締めくくつた。

「・・・頭いいですね、ローラさん」

さつきから聞いてばかりだったベルフューゴールが口を開いた。

毒物百科はもうカバンの中にしまわれている。

もう読んじゃったのだろうか？まさかね。

「既に存在する条件を考察しただけさ。港にしても魔物にしても、

私の力で何か状況を変えたわけではない。」

その考察が常人にはできないんだけどね・・・

「・・・と、おしゃべりしている間に港の近くまで来たようだな。

」

言われて視線を上げた。

地平線付近に海が見える。

その周辺には石造りの建造物が立ち並び、太陽の光を受けて白っぽく光っていた。

雑誌に載つていそうな、美しい風景。

だが俺にはその美しさがどこか薄っぺらく見えた。

例えるなら、中身の無い剥製。

俺の「視力」は目に映る全ての建物が、人の住んでいない廃墟であることを知らせてくれた。

美しいのに、不自然。亡骸のようなその姿からは負の瘴気が感じられる。

ここ、夜は怖そうだな・・・

俺は珍しく、実体を伴わない漠然とした恐怖を感じた。

第十七話

「ほんとに来るんですかね~」「ふーつ、と煙草をふかす青年に、中年一步手前といつた男が腕組みしながら答える。

「さあな、まあ來てもおかしくないとは思うが・・・」「俺・・・なんかこの街嫌いなんですよね~。」

「そうか?俺は煩わしい奴が一人もいないから好感を持つているが・・・」

「煩わしいも何も入つ子一人いませんけどね~」

「そんなことより、お前はどうして変だと感じるんだ?」

「え?別に、そんな大したことじやないですよ。」

「いや、魔導師の勘は良く当たるからな。具体的に言つてくれないか?」

「・・・魔力、みたいなのが感ぜられない、こともないよ~うな・・・」

顎に手を当てながら曖昧に言つ青年。

「他国で会つた魔物の気配に、どことなく似てるんですね」

「・・・ふむ、もしかすると噂つてのは本当かもな。」

「噂ですか?」

「ここの港町の近くの海で船が消えるって話、聞いたことあるだろ?」

「あーありますね~」

「あれが魔物の仕業じゃないか、つていう話だ。」

「・・・海に棲む魔物つか。今まで考えたことも無かつたんですけど、確かに有り得ますね。・・・って俺達危なくないですか?」

「港町から人がいなくなつたのは皆氣味悪がつてだ。実際に被害が出たわけじやない。だから大丈夫だろう。」

普通そういう廃墟群は犯罪の温床となるのだが、これ以上治安を悪化させたくないベラドンナの策で、「港町でも人が消える」とい

う流言がはやつたため今ではチンピラも近寄らなくなつていた。

二人の男は廃墟の中でも一番しつかりしていた教会の一階、バルコニーから窓越しに街の出入口を監視していた。

「にしても見張るだけって言うのもなんていうかなんていうか……」

「俺だつてそりや不満だよ。でもあの飛行船から逃げたつていうんだから俺達の手には負えないだろ？」「あんな小娘がいても、ですか？」

「もちろん俺達が、セラティエルから拉致した娘は大したことない。だが後の二人が……」「……そうですね。」

専属ハンターと虐殺墮天使。

特に後者のおかげで盗賊団の指揮に影響が出ていることを、それなりに高い地位にいる一人は知っていた。

退屈だなーと漏らす青年と無言の男。

二人が次に動いたのは大分経つてからだつた

「誰か来たようだな……」

ポツリと呟かれる言葉を聞き、青年は寝転んでいた床から飛び起きた。

流れるような動作で傍らの杖を引き寄せる。

「奴らですか？」

「多分、そうだな。さて連絡連絡……」

男は懐から水晶玉を取り出した。

盗賊団の幹部クラスのみが持つことを許される魔具。

魔力をこめる事により、水晶玉同士をつなげ、周囲の映像、音声を伝達する。

主に連絡手段として使用されていた。

「おいレオナール、これに魔力こめてくれ。」

はいはい分かりましたよーと返事がくるものと思っていた男は、シンと静まり返る教会を不審に思った。

そして周りを見渡す。

杖を握った青年の姿など影も形も無かつた。

「あの馬鹿やろおおおおおお！」

あれ程戦うなと言わわれてゐるのに、あいつは行つてしまつた。水晶玉を戻すと、壁に立てかけていた細身剣を引っつかみ、階段を使うのもどかしいとばかりに窓から飛び降りた。

「着いた。予想通り妨害はなかつたな。」

「せ、先輩、水・・・」

「」の前来たときはどつかに井戸があつたはずだ。」

「・・・は？」

「砂漠ならまだしも、もう着いたんだし、あんまり私も魔力を使いたくない。」

「・・・先輩これで俺が死んだら化けて出ますからね。」

「そんな大袈裟な。」

探してきます。と一声叫ぶとイワキリは走つていつてしまつた。待つてください」と後を追いかけるベルフェゴール。後二回頼んだら、出してあげたのに。

私も飛行術を使おうとして・・・やめておいた。

これで飛んでいるのをイワキリに見られたら、魔力うんぬんの話に差し障る。

私も走ることにした。

「軽装の旅人がこの街に来たら一番最初に何するか、ずばり水分補給だ。」

民家の一室、その窓から青年は井戸を見ていた。

距離にして15m。

そしてその井戸の中には毒薬が投げ込まれていた。

「熟睡している赤子のように安らかな死……正直ハンターなんて危険な仕事やつて、『』死に方が出来る人間は多くないぜ。」ビンの中の白い粉を揺らし、青年は不敵に笑った。

「・・・來た」

案の定、専属ハンターが井戸へと歩いてきている。他の一人の姿は見えない。

まとめて始末できないのは残念だが、一人だけでも十分な功績だろう。

「さあ飲めよ・・・そしてしつかり味わうんだぜ・・・」

つるべを手繩り寄せ、桶を手に持ち水を口に・・・含んだ。

そして苦しむことなく、ぱつたりとその場に倒れてしまった。

「うふはははは。案外、大したことなかつたな。簡単簡単。」

声を押し殺して笑う青年。

そのまま倒れているハンターに近づき、愛おしそうに耳打ちする。

「俺の出世の足がかりになつてくれてありがとよ。」

「いや礼を言うのはこちらの方だ。」

「・・・はえ？」

青年は視界から入る情報を脳で処理するのに、多少の時間を要した。腕によりをかけて作った毒を飲んだハンターが、何事も無かつたかのように立ち上がったのだ。

「なんてつたつて『案内』してもらえるんだからよ~」

青年は立ち上がる動作、口を開く動きが全てスローモーションに見えた。

「ありえない・・・そんな、ありえない・・・
もう自分が何を口走っているのかも分からぬ。」

結局青年は、ハンターの当身が鳩尾に決まり、意識がブラックアウトするまでの間ろくに抵抗することも出来なかつた。

「やっぱり毒、入つてたんですね。」

「ああ。死んだ振りつていうのも意外と難しいな。にしても良くこの距離で『匂い』が分かつたな。」

イワキリは引きずつている男を一瞥する。

華奢な体つきと杖が、その男の職業を示していた。

井戸まであと10m、といったところでベルフェヨールが追いつき、「毒のにおいがするから井戸の水を飲んではいけない」と言つてくれなければ命を落としていた。

「どこかで見たような・・・あ、私を飛行船にやられた男です！」

「ほんとか？ならこいつは盗賊団の一員つてことで間違いないな。これが意味する事はなんだ？」

部長の推測が間違つていた、ということだろうが、いや俺達を殺すつもりならこんな杜撰な計画であるはずが無い。よつてこいつが「ダイスの田」とかいう暗殺グループの一員だとは考えづらい。となると・・・構成員の一人が俺達を偶然見かけてあわよくば殺そうとした、といったところか・・・

「まあ詳しいことはこいつ自身に聞きやいいよな。」

盗賊団や魔物の巣窟に関して、絞れるだけ絞つてやろう。

俺はこの時、「仲間がいるかもしねー」ということをすっかり失念していた。

第十八話

「つかまつちやつたよ～じうあるよ～」

青年、レオナールはぐるぐる巻きに縛られた縄の中、頭の中でもぐるぐると独り言を繰り返した。

もう先ほどの恐慌状態からは回復している。

彼は天井を見上げた。

建物の感じから言っておそれくまだネレイドの近くだ。ギースさんは助けて来てくれるだろうか・・・いや、彼に頼つてばかりじゃ駄目だ。自分でなんとかしなければ・・・って言つても魔導師は杖など何にも出来ないんだよね・・・はあ、これなら毒なんて不確実な方法とらずにギースさんと戦つていれば・・・ってかそれ以前に戦わずに連絡だけしてれば良かつたんだよな・・・

いつになつても答える出でこない自問自答は、ドアを開ける音で中断された。

こげ茶色のロングヘアーに水色のワンピース。

宿屋からさらつたベルフェゴールとかいうやつだ。

「十分休息はとれたかしら？」

「・・・休息。俺達盗賊団はこういう状態を『監禁』って呼んでいる。ボキヤブライー少ないところの先苦労するぜ？」

「もしかして自分の置かれている状況が分かつてない？」

「よおーく分かつてるぜ。盗賊団の秘密喋れど、あんたらはそういういたい訳だ。」

「そうこうこと。話して。あ、後嘘つこうとしてもすぐ分かるから。」

後半のセリフに若干疑問を覚えながらも、青年は答えた。

「口が堅くないと出世できない組織に所属してるものでね」
ふう、とため息をつき、レオナールを冷めた目でみるベルフェゴール。

数秒後、彼女はポケットから小瓶を取り出した。

「あのね、私もこんなことあんまりしたくないんだけど……いや、本当はすごくやりたいんだけどイメージが崩れちゃうから敢えてそう言ひだけなんだけど……」

「なんだ、拷問にでもかけるつてか？やつてみなよ。」

せせら笑うレオナールだが、次のセリフを聞いて口を開けたまま固まってしまう。

「『導き手』って薬知つてる?..」

「…・・・は?..」

レオナールは耳を疑つた。

導き手。レバーレンスの後継者争いの大戦時使われた自白剤である。正確さに著しく欠く拷問の代わりとして、初代セラティエル国王が自ら開発、使用された。

その強すぎる効力から、他国に漏れ無いよう誰にも調合方法が伝えられることがなく、歴史の闇へと消えていったとされる伝説の薬である。

薬学に関して深く研究している者でもなければ知りえない名が、目の前の少女の口から出された。

それは彼を再び驚愕させるのに十分であった。

「これがその薬ではない・・・つていう保障はどこにもないわよね？」

「馬鹿な！有り得ない！この俺がどうしても作れなかつた薬を、お前みたいなガキが作れるわけがない！」

「うん。多分完璧じやあないでしうね。きっと不純物とかもいつぱい入つてゐるでしうね。一度飲んだら廃人になつちやうかもね。そしたらあなたの研究とか知識とか、誰にも知られること無くこの世から葬られちゃうわよね～」

「はなせこのやうおおおおおおー！」

「野郎？見ての通り私は女なんだけど。ボキヤブラリー少ないとこの先苦労するわよ?..」

第三者が見れば彫刻のよつに整つてゐる、と感じるであらう天使の微笑を浮かべるベルフェゴール。しかしレオナールには悪魔の嘲笑にしか見えなかつた。

「・・・分かつたよ。負けだ。負けだよ。」

「分かつてもらつてうれしいわ。」

もうどうにでもなれ。

自暴自棄を顔中で表現してゐるレオナールは、やがて情報を話すために口を開いた。

「イワキリさんもローグさんも、ほんとにすゞいです！」

「いやベルフェの演技の方がすゞいと思つよ。」

「イワキリ君に同じ。私達はちょっとばかしこうのに慣れてるだけさ。」

どの程度骨のある奴か分からぬ以上、最初から拷問にかけるのは得策ではない。何よりそれは英雄のすることではない。だから自白剤を飲ませると脅して情報を引き出すのはどうづか。それがイワキリの見解。

イワキリ君に付け足として、魔導師は知識を重んずる傾向が強いから、痛めつける拷問より「廃人になる」と言つて知識が失われると脅すと効果的ではないか。それが鬼怒川の意見。

「伝説の自白剤」がありますからその名を出しましよう。毒で私達を殺そつとしたぐらいだからきっと相手は知つています。というのがベルフェゴールの案。

こうして3人は相手を全く傷つけることなく、情報を引き出すことに成功したのであつた。

「さて、と。あいつこの後どうします？」

「解放してやつても構わないだろう。イワキリ君を殺そうとしたのは独断みただつたから追つ手が来るとも考えにくい。」

「私も賛成です。命を取つてしまつのは可哀想ですか。」
やつぱり2人とも考え方が全然違うな、とイワキリは密かに苦笑した。

鬼怒川の考えは要約すれば「必要が無いから殺さない」。つまり必要があれば殺すと言つているのに等しい。

それに対しベルフェゴールは「殺したくないから殺さない」、感情を根拠としている。

この違いが今後の旅にどのように影響していくか、少し不安だとイワキリは感じた。

しかしそうに考えを改める。逆に言えばバランスが取れているということかもしれない、と。

理性で判断する部長、感情で見るベルフェゴール、そしてユーティルポジションで直感で進む俺。悪くないな。

イワキリの楽観的で前向きな考えが、吉と出ぬか凶とでるかはまだ誰も知らない。

時を同じくして、イワキリとは反対に超ネガティブになつてゐる人間が一人。

「くつそ・・・いつそのこと見捨てちまうか・・・」

ギースは細身剣をいつでも抜けるよう注意を払いながら、相棒のレオナールがいか辺りを見回した。

ギースは部下思いの上司であつたが、任務のためなら切り捨てる敵しさも併せ持つてゐる。それでもまだレオナールを探してゐるのは、彼一人では水晶玉に魔力がこめられないためであつた。

ネレイドの港町はかつて繁栄していたこともあり規模が大きく、探し物にはあまり適していない都市だつた。

「これやると隙ができちまうが仕方ねえ・・・」

ギースは全身を脱力させ眼を瞑ると、耳に意識を集中させた。

しんと静まり返る周囲、常人ならそれ以上の感想を抱かないでいるがギースは違つた。

「近いな。」

僅かな空氣の振動を彼は捉えていた。

慎重に一階建ての民家に近づき、ドアに耳を当てる。

十数秒後、ギースの顔は吐き気を催したようになつた。

「あの野郎、捕まつちまつてゐるのかよ・・・」

しかも会話の内容からして少なからず盜賊団の情報を話してしまつてゐる。

考えうる限り最悪の状況。

これで3人組を殺さなければならなくなつた。

「とりあえず助け出す、か」

そんなに広くないこの家のこと、監禁するのなら一階だらう。腰のナイフを一本取り出すと壁の隙間に差し込み、それを足場として飛び上がり、そのまま窓を突き破る。

「つたく、手間かけさせやがって!」

当然憎まれ口に反応してくるだろうとギースは思つたが、またしても予想は裏切られた。

椅子に腰掛けさせられているレオナールは俯いたままピクリとも動かない。

元アンドラスの突撃部隊隊長の勘が、一つの事実を示した。

素早く近寄ると手首を握り、呼吸音を確かめる。

そして彼は確信した。

「死んでやがる・・・」

もつとよく見れば、おそらく死因であるつ小さい穴が胸にあいているのが分かる。

ちょっと強いからつて調子に乗つているガキだと思っていたが、まさか用済みになつたら大事を取つて殺すような奴らだとは・・・

同時に背後の扉が開き、当の3人が現れた。

そしてレオナールが死んでいるのを認めた。

ベルフェゴールが息を呑む。

奇妙な沈黙は、イワキリとギースの全く同じセリフに破られた。

片や部下を守りきれなかつた自分に怒り、片や突然の侵入者に対し疑問を抱きつつ。

「てめえが、やつたのか！？」

第十九話

ギースは腰の細身剣を抜くと、一番近くにいた鬼怒川を切りつけた。対して3人は突然の侵入者を敵と認識するのに、若干の時間を要したため反応が遅れた。

「つと。」

鬼怒川は反射的に義手である左腕で剣を受け止めた。彼自身意識しての行動ではなかつたが、結果的にただ受け流す以上の効果が表れた。

「・・・！？」

手袋をしている鬼怒川の手は外見上は義手見えず、一見しただけだと生身の腕で剣を防いだように見える。それがギースの意識を混濁させた。

人間は自分の想定外の出来事が起きると一瞬、思考が停止する。そして戦闘においてその隙は致命的となる。

鬼怒川は関節をたくみに捻つて義手を剣に巻きつけると、一気に力を込めた。

バキンと小気味いい音が響くと、細身剣は3つ以上のパーティに別れてしまつた。

そこで止まらずすぐに右足をフルスイング。目標はギースの左頬。

「うげがつ」

うずくまるギースに対し、鬼怒川は興味をなくしたといつも左腕をしげしげと眺めた。

「なるほど・・・盾として使用することにより相手の意表をつく・・・か。これはいいな。」

「さてさてさて、ちょっとら話を聞かせてもらいましょうかね~」左腕を眺めブツブツ言い出した鬼怒川を見て、しうがないとばかりにイワキリが口を挟んだ。

ゆっくり顔を近づけるイワキリ。第三者が見れば隙だらけな動作。

ギースもまた引っかかつた。

しゃがんだ態勢から、短くなってしまった剣をイワキリの喉へと突き出す。

「喧嘩は相手を見てから売るものだよ。」

イワキリは慌てず騒がず、右手でピースサインを作り、その真ん中で器用に剣を受け止める。

そのおどけたような仕草で避けられたギースは、今度こそ自分の敗北を悟つた。

「人間って、結局自分が可愛いんだよね。いやそれを否定するわけじゃないけどもうちょっと粘つて欲しかったな~」

時を同じくして、「ダイスの目」構成員である髑髏模様の麗人は2kmほど離れた建物の屋上にいた。

自分の愛杖をまるで銃のように構え、先端をイワキリ達に向けて。「ある程度抵抗してたら、捕虜になつた失態には目をつぶつてあげたのに、情報話しちやつたら殺すしかないじゃんね~」

麗人は心中で独り言を言いながら、杖の空洞部分に静かに、魔力を込めていく。

近くには誰もいないと分かっていても、決して気を抜かない。体内に水を取り込み魔法によつて酸素を取り出すことで呼吸音を消したり、血流を操つて心音も極限まで抑えたりするなど、彼女は考え付く限りの方法で気配を消しきつていた。

必要最低限の動作で、杖の太さに合つよう加工した氷を先に詰める。周りの水蒸気の動きを魔法で読み、2km先のターゲットの位置を割り出す。

そして2km先の鬼怒川に正確に狙いをつけた。

「まずは、彼からよね。じゃあね。」

氷の玉を発射しようとして・・・動きを止めた。
そして魔法を解放する。

「そうだった。ネレイドからセラティエルに移動するまでは攻撃しちゃいけないんだっけね。」

海に潜んでいるかもしない「五つの座」をターゲットを使って探るため。そう彼女は言っていた。

少しの間麗人は考え、当座の行動方針を決めた。

もし3人が魔物に倒されたら。

その時は戦いで消耗した魔物を倒そう。ビコラ辺に出現するかは分からぬが、私の索敵能力ならばセラティエル海岸ぎりぎりまで射程に捕らえられるだろう。

もし3人が魔物を倒したら。

同じように撃ち殺せばいい。

どちらにしてもいつも通り、最終的には氷の玉をぶち込むことになるのだ。

それまでのんびりしていよう。
彼女は構えをとくと、杖の手入れを始めた。

「何を言つてゐるのか理解できないんだが・・・」

「だから早く殺せと言つてるんだ。俺は何も話さん。一思いにやればいいだろ? さつきみたいによ!」

「さつきみたいにして・・・いや、別に殺すつもりじゃなかつたんだが・・・」

「俺をなめてるのか!? もう何でもいいから殺せ!」

3人は噛み合わない会話に内心頭を抱えていた。

因みにギースの言つている「さつきみたいに」はレオナール殺しのつもりであったのに対し、3人は鬼怒川がギースを蹴り飛ばした事をさしているのだと勘違いしている。

「あーんもう！あなたを殺すかどうかは別にして！あなたは結局何なの？」

業を煮やしたベルフェゴールが言った。

「分かりきつていること。盗賊だよ盗賊。」

3人は顔を見合わせた。

「この死んでる人の仲間？」

「ううさ、お前達が殺した奴の仲間だよ。」

その言葉に、それまで眉間に皺を寄せていた鬼怒川が目を開けた。

「分かった。要するにお前は俺達が殺したって思っているんだろ？ でも違うんだよ。」

「・・・何？」

「ここの死体の傷、血が一滴も出でていない。まるで元からあつたみたいに、な。お前が信じるか信じないかは自由だが、私達じゃこういつた殺し方はできない。何か特殊な魔法で『狙撃』でもしない限りこんな風にならない。」

「そ、それじゃ・・・一体・・・」

「捕虜になつたから情報話してしまつ前にバラされた。そんなところだろう。」

「そんな・・・馬鹿な・・・こいつは仲間に殺されたっていうのか・・・」

その間、イワキリはギースの一拳一動、顔の表情まで細かく觀察した。

自分達が殺したのではない以上、一番怪しいのは進入してきたこの男である。

しかし鬼怒川の言葉に動搖しているところを見ると、ビツヤヒラ本当に殺された奴の仲間だつたらしい。

そして同時に、重大な事実に気づく。

「外から撃たれたつてことなら、こんなところに立つてたら俺達も危ないじゃないですか！」

「私も4秒前にその結論に達したが、今まで撃たれてないところを考えると、どうやら今私達をどうこうするつもりは無いみたいだな。だから今重要なのは『気づいていない』振りをすることだ。」

「そんな事後承諾的な……それにもし狙撃されたんじゃなかつたら……」

「おおいおおいワキリ君、魔導師の私が狙撃と言つたんだから狙撃だよ。」

じろりとイワキリを睨む鬼怒川。

「流派の一つにあるんだよ。杖を空洞にして中に魔力をこめて、弾丸を発射するっていうのが。当たつた相手は魔力を帯びた弾丸に精神力を奪われて衰弱死するらしいが、特徴として血が流れないといつていうのがある。そしてそれはこの状況と完全に一致する。」

鬼怒川は言い終わるや否や、床に縛られて転がつているギースを蹴り飛ばした。

うめぐギースと、豹変した鬼怒川に驚くイワキリとベルフェゴール。そして彼はそのままギースの胸倉を掴んだ。

「最後に一つ質問をしよう。すごく簡単な質問だ。答えたら解放してやるが、答えられない場合は俺の考え方付く限り最高に残酷な方法でお前を殺す。」

鬼怒川の言葉にしんとなる室内。

「質問だ。ネレイドのどこに行けば船が手に入る?」

「ま、待て。俺は知らないんだ。」

「3秒以内だ。3、」

「俺は幹部だぞ!?.これ以上盗賊団の怒りを買つつもりか!?.」

「お前を殺すにしても、それはこちらの覚悟を示すことになる。どちらにしても損はないんだよ。2・・・」

「ほ・・・本当に知らないんだ・・・」

「じゃあ死ぬんだな。盗賊なんてやつてるんだからそれぐらいの覚悟は出来るだろ?1・・・」

「分かつた、分かつた。言うから、どうか命だけは・・・」

「嘘じゃなければ、な。どこだ？」

「教会の・・・近くだ。ここから300mぐらいのところに船の格納庫がある。今は使われてないから古くなってるかもしれないが・・・

・赤い屋根の建物だ。」

「イワキリ君。」

「はい先輩。」

イワキリは自分に何が求められているのかを一瞬で理解した。

窓から教会の尖塔を目印に、赤い屋根を探す。

そして見つかると、さらに目を凝らし、中に船があることを確認した。

「ありました。」

「む、そうか。」

「俺の言つたことはあつてただろ?だから解放していく・・・」

そこで突然、ギースは押し黙つた。

目の前の敵が、いつの間にか取り出した鉄棒を振りかぶつてたからだ。

「じゃあこれで、お前とはさよならだな。」

「おい、まで、約束が違つぞ!」

それに対して、鬼怒川は全く表情を変えなかつた。

冷たい殺氣を放つその姿は、まるで氷の彫像である。

ギースは戦慄し、そして自分の認識が甘かつたことに気づかされた。最初の印象はただの調子乗つているガキ共。

次は敵を殺す覚悟のある奴ら。

しかしどちらの認識も、目の前の男には当てはまらなかつた。

その雰囲気はそんなに生易しくなかつた。

彼は縛られていたから恐怖しているのではない。もつと違う次元の恐ろしさ。

それは丁度、神々しいものに対して思わずひれ伏してしまつような畏怖の感情。そして死への恐怖。

そんな思いにとらわれたギースは思わず呟いてしまつ。

「鬼・・・」

彼の言葉と同時に、鉄棒は振り下ろされた。

第一十話

「さやあ！」

ベルフェゴールは鉄棒が振り下ろされたのを見て、思わず声を上げ目を逸らした。

「い・・・いくらなんでもローグさん酷すぎますよ…」

顔を背けながら彼女は言つた。それはまだ会つてから日の浅い鬼怒川でも十分に感じ取れるほど嫌悪に満ちていた。

「そんなこと、英雄のすることじやありません！」

「何が英雄のことじやないって？」

その言葉に思わず振り返るベルフェゴール。

彼女の目に映つたのは・・・にやにやしているイワキリ君と苦笑している鬼怒川の姿である。

そしてギース。しかし彼女が想像していたのと大分様子が異なつていた。

「・・・あれ？」

「言つたじやないかベルフェゴールさん。必要の無い殺人は犯したりしないって。繩を切つただけだよ。」

恐怖のためか気絶してしまつているが、ギースはこれといって変わつた様子はなかつた。

「よ・・・良かつた・・・」

同時に、彼女の中で鬼怒川を信頼していなかつたことに対する後ろめたさが芽生える。

それを押し隠すため、彼女は無理に話を続けた。

「なんていうかその・・・あまりに鬼気迫る様子だったので・・・

「確かにそれは俺も感じました。何か魔法とか使つたんですか？」

「いいや、全然。」

鬼怒川は鬼怒川で一人の様子と先程の感情に対し、不安と疑問が頭をよぎつっていた。

あの鉄棒を振り下ろそうとした刹那。彼は唐突に「この鉄棒を頭に振り下ろせたらどんなに気持ちがいいだろ」と感じていた。

それは彼がかつとなつた時と同じような、暴力的で野蛮で、田に入るものの全てを壊したくなるような衝動にかなり似通っていた。

元の世界にいた頃よりも鮮明になつていて、「二つ目の人格」。

彼はその事実に戦慄しながらも、他の一人に悟られないよう振舞う。

「さてそれじゃ、船を取りにいこうか。」

「先輩、危なくないですか？」

「狙撃のことだろ？ ふむ、イワキリ君なら、きっと疑問に思つと考えていたよ。」

そのセリフにちょっとむつとなるベルフェゴール。

その様子を見てすかさずイワキリはフォローを入れた。

「そうですか？ 僕は別に深い意味があつて質問したわけじゃないんですよ。なんとなく思いついたまま言つてみただけで……」

その返答に小首を傾げる鬼怒川。他人の表情を伺つて行動したりしない彼はその発現がフォローだと言うことに全く気づいていない。「そつなのかな？ まあいい。さつき私が狙撃について、心配要らないと言つたのは単に撃たれてないからというわけではもちろん、無い。ちゃんととした理由があつてのことさ。捕虜の・・・えーとレオナルだっけ？ そいつが尋問のとき言つた『ベラドンナ様はこここの近くに魔物が潜んでいると考えている』というセリフからだ。」

そこで言葉を切り、めつたに見せない悪戯っぽい表情で2人を見た。君たちには分かるかい？ という仕草である。

ベルフェゴールが名譽挽回とばかりに意気込んで答えた。

「私達をセラティエルまで渡させて、魔物に当たらせようとしたいる。ということですよね？」

「その通りだ。ベラドンナの性格からいつていぐら捕虜になつたとはいへ、身内を手にかけるというのは相当な事情があつてのことだろう。それはすばり、先ほどの情報、つまりセラティエルに渡るま

で手を出さないといふことだ。それが伝わるのはまずいから撃たせたんだよ。しかし時既に遅しといつわけで、こつちは知っているわけだ。これはすく重要な事さ。」

私の考えが間違っているという可能性もあるがね、と鬼怒川は締めくくった。

「さて、説明が終わつたといひでそろそろ行こうか」
ベルフュールが「了解です。」と返事しているのを聞きながらイワキリは考えた。

もし暗殺者の攻撃範囲がセラティエル海岸まで届くのであれば、このまま渡るのは危険だ。魔物を倒した瞬間にこちらを殺そうと考えるかもしれないからだ。それより時間がかかるにしても今暗殺者を探して叩いてしまつた方がいいような・・・

「どうしたんですか、イワキリさん？」

「ん、いやなんでもない。」

彼は考えるのをやめた。

それは鬼怒川を信用してといひとも、一々質問するのが面倒だつたためである。

彼の直感も、あまり追及しなくても大丈夫だろうと結論を出していた。

「退屈、退屈、退屈・・・」

時を同じくして、セラティエル国の海岸とネレイド港の中間地点の海底で、魔物が喰いた。

「・・・せつぱり、全部の船を沈めちやうのはやうしきだったかしら・・・」

まどろんでいるようにまづくつと瞬きを繰り返す。そのたびに黄色い瞳が見え隠れする。

「早く来ないかな・・・そうすればまた歌えるのに・・・」

殺されない限り死なない不老の肉体。

それはかつて魔物が人間だつた頃、欲してやまないものだつたが、手に押し付けられる形で得てしまつた今は、この事実が悲しみとなつて魔物を圧迫している。

永遠に近い存在は、最も孤独に近い。

魔物は何百年生きてきた中で、それだけが真実らしく思われた。

「つらい、つらいなあ・・・」

何度もになるか分からぬセリフがこぼれる。魔物となつてしまつた今、涙を流すことすらできない。

後数時間でその状態に終止符が打たれることを魔物は知らなかつた。

「にしても、イワキリ君もベルフェゴールさんも船を動かせたなんてちょっと意外だな。」

「そうですか？こんなの直感で何とかなつちやいますよ？」

「私にしても本で得た知識をイワキリさんに伝えていくだけですし・・・」

毎年バカンスに行つているためかコットやクルーザーの運転についてかなり詳しいイワキリと、レバーレンスの航海術について本で一通りの知識を得たベルフェゴールによつて、3人が乗つた船は順調にセラティエルへと向かつっていた。

鬼怒川はいつ現れるとも分からぬ魔物のため見張りを行つている。「あ、なんだか急に霧が深くなつてきましたね。コンパスあるから大丈夫ですけど、なんかいやーな感じですね。」

「ローラーさん、魔物は・・・？」

「今のところ魔力は感じ取れない。」

そう答へつつも神経を研ぎ澄ませ続ける鬼怒川。

持ち前の集中力を發揮させる彼は、しかし2人の様子の変化に気づけなかつた。

背後の足音に振り返る鬼怒川。

「・・・！？おい何やつてんんだ？」

操舵輪から手を離し、ふらふらと甲板を歩き出したイワキリと、同じような状態のベルフェゴール。

そのまま海に飛び込むとする2人を寸でのところで鬼怒川が引き戻した。

「何だ・・・いつたい何が起こっている・・・？」

振り払おうとする2人を押さえつける鬼怒川は、霧の中で微かに歌声のようなものを聞いた気がした。

第一十一話

鬼怒川 龍一の才能。

それは絶対的な「意思の力」である。

彼は人並みに感情を持っていたが、それが行動に影響することは決してなかつた。

一度目標を立てたら完遂するまでどのような誘惑にも負けることが無かつた。

その力故に、彼は無意識のうちに精神攻撃、憑依、恐怖喚起、幻覚に対しても異常なまでに高い耐性を獲得していた。

眠れる特性が、英雄ツアードによつて呼び覚ましたのである。しかし皮肉なことに、彼の防御力は攻撃されているのが分からぬほど卓越していたため、彼の人を省みない性格ともあいまつて事実の認識という点で大きく遅れをとつてしまつた。

現在の彼も丁度そのような状態に陥つていた。

「この音が原因なのか・・・？」

彼の膂力も2人合わせた力の前に徐々に進行を許してしまつてゐた。鬼怒川は必死で思考し続けた。

不幸中の幸いと言つべきか風は進行方向吹いていたので、舵取りさえ何とかなればセラティエルに行くことはできた。

「どうすれば振り切ることが・・・」

・・・いや、だめだ。そんな逃げに走るような行動じゃだめだ。

彼は自分で自分の考えを否定した。

これはピンチであると同時に、最終目的である「魔物退治」を達成するためのチャンスでもある。今セラティエルに着いてどちらにせよこの魔物を叩くために戻らなければならないのであれば意味がない。

「・・・といつてもどうしようもないがな。」

鬼怒川はより力の強いイワキリを抑えるため杖を出し、彼の体に引

つ掛けた。

それと同時に、イワキリの呆けたような表情が元に戻った。

「あれ？先輩何やってるんですか？」ってかベルフェも・・・？」

「・・・正気に戻ったのか？」

鬼怒川は自分の杖に視線を落とした。

「なるほど、精神の具現化とな・・・」

「どうしたことですか？」

「よく聞いてくれイワキリ。今我々は魔物に攻撃されている。この歌声みたいなのがそうだ。海に飛び込みたいと思わせる精神攻撃の一種だろ？」

「・・・いきなりですね。」

「いきなりというか、さっきのイワキリ君もベルフェゴールさんと同じような状態だったんだが・・・まあそれはいい。どうやら私の杖に触れているとその攻撃が効かないみたいだから、これに乗つて本体の魔物を叩くんだ。」

「オーケイです先輩。」

「杖を止めたいたところで大声を出して合図してくれ。」

イワキリは頷くと、歌声のする方へ向き杖に乗つた。

「頼むぞ。」

「任せてください。」

ベルフェゴールがうつろな顔で何も言つてくれないのをちょっと悲しく思いながら、イワキリは船を離れた。

「おかしい・・・どうしてなの・・・」

岩礁の一つに腰掛け歌う魔物は、いつまでも海に飛び込む様子の無い相手に苛立ちを覚えていた。

全く効いていない、というわけではなく、現に2人は後ちょっとで船から落ちるところだった。

それ有何者かが邪魔したのだ。

「私の歌が聞こえないのかしら……」

魔物は本格的に歌おうと立ち上がり、息を大きく吸い込む。しかし不意に起こった風に危険のシグナルを感じ取り、そのまま後ろへ倒れこむ。

魔物の頭上すれすれを大剣が通り過ぎた。

「ストーップ！」

洋上に響く大音声。

魔物は顔を上げ、声をあげた相手を確認する。

黒一色の服、右手にたつた今投げたはずの大剣を持った少年だった。鉄の棒に乗つてバランスよく宙に浮いている。

「誰・・・？」

「ありきたりなセリフで申し訳ないが、人に名前を尋ねるときは自分が基本だぞ？」

少年 イワキリは不敵に笑いながら「と言つても……」と続ける。

「その姿を見れば分かるか、魔物さんつて」

青白いというより透明に近い白い肌。何層にもわたつて体に巻きつけられたボロ布。

そして「蛇」「髪の毛」。

イワキリの世界で言うところの「メデューサ」だった。

彼女は興味深そうに黄色い瞳を動かしながら、イワキリを見据えた。

「私の歌つて下手かしら？」

鬼怒川なら無言で大剣を振り下ろすであろう場面。しかしイワキリはくだらない軽口の応酬が好きだったので、にやりと笑いながら茶化した。

「上手い下手以前の問題だね。歌うと聞いた人間が死にたくなるなんていうのは公害だよ公害。」

魔物は悲しそうに俯きながら言つ。

「そう・・・正氣を保つているあなたはきっと分かつてくれると思つたのに・・・」

その様子にちよつと言い過ぎたか、と心を痛めるイワキリ。
背後で盛り上がっている水の柱には気づけなかつた。

「死んで。」

水の柱は槍の形をとり、イワキリ目掛けて落ちてくる。

「・・・！？」

先端は身を捻つてかわすが、残りの水流をもろに受けてしまう。
イワキリは海に落ちそうなところを辛うじて左腕で杖を掴んだ。

「魔物になるとね、人間の肉がとっても好きになるの。あなたもおいしく食べてあげるからね。」

いつの間にか杖の上に乗り、イワキリを見下ろす魔物。

手には凝つた作りのナイフが握られている。

それを見たイワキリは思わず顔をしかめた。

「最後に私の歌を聞かせてあげるわ・・・」

無音の洋上、霧が立ち込める中、歌が魔物の口からこぼれる。

甘く優しく、しかし何の温かみも感じさせない冷たい歌。

それどころではないはずのイワキリも、一瞬聞きほれてしまつ。
歌いながら魔物はゆっくりと、着実に一本ずつイワキリの指を杖からはがしていった。

「く・・・そ・・・」

全身全靈をこめて握る指も、努力むなしく確実に杖から外されいく。

せめて、とばかりに振り抜かれる大剣も難なく避けられてしまう。
そして最後の一本が離れた。

イワキリと魔物の視線が空中で交差する。

そのまま彼は海へと吸い込まれていった。

「うぐぐぐ・・・」

そのころ鬼怒川は突発的な頭痛に目がくらんでいた。

彼の耐性も、杖に対するゼロ距離での攻撃によつて深刻なダメージを負つていた。

それでもなお理性を保つてゐる鬼怒川だが、ベルフェゴールへの注意が逸れてしまう。

「・・・あっ！」

ベルフェゴールの踵が彼の足を強打する。

それでも掴んだ服を離さなかつた結果、よろけた彼はベルフェゴール共々柵を乗り越えてしまつた。

澄んだ水音が辺りに響いた。

身を切るような冷たい海水の中、呪われた歌が脳に充満して意識が飛び前に、イワキリは自分の乗っていた杖が消えているのに気がついた。

「先輩も・・・やられたのか・・・」

攻撃の機会を魔物に与えてしまつた自分の責任だ。

ああ俺は死ぬのか、グッバイ俺の人生。

朝の通勤ラッシュのように理性が身動きを取り難くなつてゐる中、イワキリはそれでも、と口を動かした。

「他の2人は助けてくれ。」

相手に伝わったかどうか確認する前に、彼の意識は深い闇へと沈んでいった。

「もつとなぶればよかつた。」

魔物はつまらなそうな顔をしながらつまらなそうな声で言った。
丁度、おいしいお菓子を口いっぱいに頬張つて味わう前に飲み込んでしまつたような気分である。

「ま、後二人いるし。」

愛おしそうにナイフを舐める魔物。

魔物は栄養を攝取しなくても死んだりしない。故に食事は嗜好の一つである。

それでも生き方が限定されている彼らにとつてみれば重要だった。
だから楽しむことに集中してしまい、油断してしまつたのも仕方ないと言える。

まずはどこから食べようかしら、と腕を伸ばした矢先である。

魔物は背中に「テロピングされたようなかな痛みを感じた。

彼女は動きを止め、背中に手を回して原因を探りうとしたが遅かった。

痛みを感じた部分がまるでブラックホールにでもなったかのよう、「体中の力という力が吸い込まれ始めた。

普通の人間ならば突然のことに反応できず取り乱す場面であるが、何百年と生きてきた魔物は何百年と生きてきた魔物は

少し違つた。

漠然とした滅亡の予感。

死にたい死にたいと前から思つていたのが、唐突に叶つてしまふ戸惑い。そして死に瀕して初めて抱くもう少し生きたかったという矛盾した思い。

自分なりの結論を出す前に、魔物は事切れた。

「任務完了」と

杖を構えながら咳く髑髏の麗人。

魔法を解くと同時に深い疲労が彼女を襲う。

気配を消す魔法は体に相当な負担を強いていた。

視界が揺れ、思わず手をついてしまいながら彼女はハンター三人のことを考えた。

あの時は3人が海に落ちた時点で死亡と判断したが、念を入れて生死を魔法で探るべきか・・・

天秤の一方では休息が、もう片方では任務続行が乗せられていた。しかし彼女の精神力がこれ以上の任務を拒否し、休息の方をぐっと押し下げた。

彼女は帰り支度をしながら、若干言い訳じみたセリフを自分に言い聞かせる。

「魔物がホームグランドである海に落ちた獲物をすぐ殺さないはずないし。」

彼女の思考過程には「魔物が獲物をなぶるかもしれない」という事象が全く欠落していた。

イワキリは夢を見ていた。

前後左右上下が分からぬ真つ暗な空間で、彼はポツンと立つている。

ここがどこなのか、なぜここにいるのか、得てして夢ではそんな事に疑問を持つ人間は少ないのだが、イワキリも例外に漏れずそいつた事柄には何も興味が無かつた。

やがてぼんやりともやのよいうなものが浮かび上がり、それは人の形になつた。

ベルフェゴールの姿だつた。

「途中で諦めちゃうなんて、らしくありませんよイワキリさん。」

彼女は優しく、しかし真剣な顔で言つた。

イワキリは返事をしようとしたが、まるで顎に枷でもはめられるかのように口は動かなかつた。

焦燥感に駆られながら無理に舌を動かそうとしていると、やがて白い煙は鬼怒川の形になつた。

「君みたいな気高さを持った人間が、あがこうとしないのは恥だ。」
部長らしい厳しい意見だ。そう思つとまた煙は変形した。

白と赤の派手派手なスーツにやけた顔。

脳の片隅に追いやられていたエウリノームだつた。

「僕はね、最後まで向かつてくるであろう相手としか戦わないんだ。

」

挑発するよつた口調に猛然と反発したくなるが、やはり言葉は出ない。

「煙は次にベラドンナになつた。

「あなたの命の重みは、そんなもんなの？」

見下すような姿勢で言われたイワキリは掴みかからうとして、突然体が水槽にでも放り込まれたように冷たくなった。

「な、なんだ！？」

イワキリはそこで夢から覚め、自分が海に漬かつて凍えていることに気がついた。

同時に今までのことがフラッシュバックする。

慌てて辺りを見回すが、水面に立っていた魔物はどこにもいなかつた。

白く立ち込めていた霧もどこかに消え去っていた。

自分は天国に来たのか？いや天国ならもう少し暖かいだろう、じゃあ地獄か・・・とイワキリは全然見当違いのことを考え始めるが、水面に浮かんでいる短剣が目に入り思考は中断された。

手に取り、確信を持つ。

「これ魔物が持つてた得物だよな・・・？」

つまり、全く考えにくいことだが、誰かが意識を失っている間に魔物を倒してくれた、ってことか・・・？

イワキリは最も可能性のある鬼怒川とベルフェゴールの事を思いつくが、すぐに有り得ないと打ち消す。

「・・・ま、いいか！」

魔物は死んで、この旅の目的である得物をゲットできたんだから、結果オーライだな。

イワキリの単純とも言える楽観主義の思考回路は決定を下した。とその時、彼の耳に水音が聞こえた。

振り返るとこちらに向かつて慎重に泳いでいる2人の姿があつた。

イワキリが口を開く前に、鬼怒川は唇の前に入差し指を立てて音を立てるな、という仕草をした。

身振りで耳を貸すように伝える。

「・・・魔物が倒されたのはおそらく、捕虜を殺したヒットマンの仕業だ。私達が死んだと思って撃つたんだろう。だからここからは

船を捨てて泳いで行きたいと思つ。うまくすればこれから先盜賊団の妨害を受けずに旅できるぞ。」

ひそひそ声でありますながら、鬼怒川の声は珍しく興奮していた。

イワキリは再度周囲を見回した。

霧が晴れたためセラティエル海岸はよく見え、距離にしても3km程で泳いでいけない距離でもなかつた。

しかし問題は・・・

イワキリは仕草でベルフェゴールに、大丈夫かと問い合わせる。それに対しベルフェゴールは笑顔で大きく頷く。

3人は静かに、見晴らしの良くなつた海で誰にも見つからないよう泳ぎ始めた。

同日、すっかり日が落ちてしまつた頃、セラティエルの港町にて一人の少年が食事をしていた。

黒いマントを羽織つたままでいなければ誰もが惚れ惚れするような「上品さ」を彼はまとっていた。

伸びた背筋、完璧なテーブルマナー。

彼に近い席の女性客にちらちらと盗み見られるほどの美貌。

しかし彼はまるで病人のように青い顔をしていた。

程なくして食事が終わり、会計を済ませると立ち上がりつたところで少年は新しく入ってきた客が目に入る。

ベージュのローブ、全身黒い服、青いワンピース。

少年は体の向きを変えるとトイレへと向かう。

個室に入り鍵をかけると彼は水晶玉を取り出し念じた。

程なくして髑髏の麗人の顔が映つた。

「何ペヨーテ？あんたが連絡してくるなんて珍しいね。」

「おいローズ、セラティエルのアスラフィル港にいるんだがさつき例の3人を見たぞ。どういうこつたよこれは。さつき始末したつて

連絡よこしたじやないか。」

しばらく続く無言。いい加減ペヨーテが怒鳴ろうとした瞬間に、ああ、と氣の抜けた答えが返ってきた。

「生きてたんだあいつら」

「生きてたんだじやねー！お前どうして見逃したんだアホが！」

「んーとね、魔物に3人とも海に落とされたみたいだつたから魔物を撃つたの。それでまあ死んでるか確認するのが億劫になつたというか・・・」

ペヨーテはまるで眉間に糸がつけられ引っ張られているかのようになびき寄せながら、無理やり落ち着いた声にして言った。

「お前の狙撃術は体に負担がかかる。それは分かつて。だが魔物が3人にとどめを刺したのを確認してから撃つても遅くないよな。」

「そうだけど・・・なんていうか、3人が死んだつて思つた途端にこう、すぐに撃つちやいたくなつたつていうか

そうだ、この女は発砲中毒なんだつた・・・

こいつに同士討ちを待つてからもう一方を撃てと言つのは、躊躇られていない犬に駆走を出しておきながら「待て」をしているようなものだ。

深い深いため息をつきながら、田が合つたりしたらキレて水晶玉を割つてしまいそうだったので顔を伏せつつ、ペヨーテは言つた。

「近くにいる仲間と組んであいつらは倒すよ。とりあえず魔物退治お疲れさん。」

「んーがんばつてね。」

そこで通信は切れた。

「あの馬鹿が・・・」

ペヨーテはトイレを出ると、先程までの「紳士」を演じながらレジへと向かった。

「さて、今後どうするかだが……」

イワキリ、鬼怒川、ベルフェゴールの3人は宿の一室、イワキリの部屋に集まっていた。

沿岸漁業が盛んで噂も無いため、ネレイド港とは比べ物にならないほど活氣がある港町の宿、部屋はそれほど広くないが清潔だった。因みに宿代は鬼怒川の負担である。

「私からは一つのプランがある。一つはエイムへ行きセラティエル王ヘネレイド、アスラフィル間の魔物を退治したことを報告する。もう一つは捕虜から聞いたこの大陸の巣窟へ行き、魔物を倒す。他には何があるかな？」

「まあどうしかですね。俺は最初の案に賛成です。装備を整えなくちゃいけませんし、とりあえず王様から報酬貰いましょう。」

本当は「ベルフェゴールの武器の購入」と言いたかったのだが、そうすると暗に今の彼女が足手まといだと黙つて居たので、オブラーントに包んだのだった。

鬼怒川には出来ない配慮である。

「そうだな。今の状態で巣窟に突っ込んでもベルフェゴールさんが危ない。何か武器を購入しなくては。」

その配慮をいとも簡単に打ち碎く鬼怒川。

イワキリは内心頭を抱えた。

「すいません、私も何かお役に立てればいいんですけど……」

「いやあなたの知識は十分役に立つてますよ。現にイワキリ君も井戸の一件ではあなたに命を救われたわけですし。」

「そうですか、それならいいんですけど。」

「ちょっと明るくなるベルフェゴール。」

鬼怒川は人に気をつかつたりしない反面、事実を曲げて人を責めるようなこともしなかつた。

無論そのことをイワキリは知っていたが、彼の場合は何事も少し遠まわしに言つた方がいいと
いう考え方である。

しかしこの場では当のベルフェゴールが明るくなつたので、彼もそ
んなに気にしなかつた。

「それじゃ、報告しにエイムへ、といつことでいいかな？」

「賛成です。」

「私も。」

「じゃあこれで解散・・・」

イワキリと鬼怒川が腰を浮かしたところ、「待ってください」とベ
ルフェゴールが止めた。

何かを後ろ手に持ちながらニヤツと笑う。

「私、盗賊団の飛行船から逃げるときにちよつと取つてきただもの
あるんですけど・・・」

「何！」

「なんだって！？」

飛行船から盗んできた。そしてそれをわざわざ言つとこいつことは今
後の旅で役立つものであるということ。

イワキリと鬼怒川は全く同じ結論に達し、真剣な顔になつた。

それを見てベルフェゴールが途端に萎縮した。

「あ、いや、あの、すぐ下らないものなんですが・・・」

そうしてワンピースのポケットから出したのは・・・一本の酒瓶だ
った。

イワキリと鬼怒川は互いに顔を見合せた。

丁度、イタリア料理店ですしを出されたような表情である。

「あ、あの・・・タグリヌスの魔物を倒したわけですし、その・・・
打ち上げ・・・みたいな・・・」

「・・・ベルフェ、俺も少し気を抜くのも大切だと思うけど、しか
し酒というのは・・・」

「・・・お酒嫌いですか？」

「いや、嫌いというか飲んだことが無い。」

少し驚いたような顔をするベルフェゴール。

「確かに飲みすぎると健康に悪いんですけど、おいしいですよ？あ、もしかしてイワキリさん達の世界では貴重だったりしたんですか。」

「法で制限されていてね。20歳以上じゃないと飲めないと。」

「そうですか・・・じゃあ駄目ですね。」

酒瓶を仕舞おうとしたベルフェゴールを鬼怒川が止めた。

「法律は国内においてのみ適応される。そして私の記憶する限りセラティエルの法に未成年飲酒についての規定は無い。というわけで今私達が飲むのは何の問題も無い。」

丁重に拒否するものだと思つていたイワキリは首を立てそうな勢いで振り返つた。

「先輩！？」

「実は私も前々から飲んでみたいと思つてたんだよ。」

「じゃ準備しますね～」

嬉々としてコップやつまみの準備をし始める2人を、イワキリは呆気に取られて見ていくだけだった。

「エウリノーム様、先程タグリヌスのリリスが討たれたとの報が入りました。」

魔物の巣窟に野太い声が響く。

目立たない洞穴である入り口とは裏腹に、内部は城の回廊に近く、奥にはセラティエル国の王の間に似せて作られたエウリノームの部屋があった。

話しているのはイワキリが闘つた牛の怪物である。

彼の重大な報告を、しかしエウリノームは心ここにあらずといった雰囲気で何かを考えているようであった。

「・・・エウリノーム様？」

「あ、うん、わかった。下がって良い。」

入り口の闇へと消えていく怪物の姿をながめながら、彼の報告を反芻した。

「リリス……かつて敵対し血みどろの戦いを繰り広げた私の妹……死んでしまったか。」

彼はゆっくりと白い手袋を脱ぐ。

蛇の黒い鱗をまとったような、お世辞にも人間の手には見えないようなものを、エウリノームは見つめた。

「不思議なものだ。かつて憎んでいたのに、今こうして死んでみると悲しみが湧き上がってくるとは」

リリス。彼女には他の兄弟が持っていた「自分の手下を作り出す能力」がなかつた。

故に人間の迫害を恐れて海の底で生活することを余儀なくされたのである。

そしてその寂しさが、彼女に悪魔の歌声を授けたのだった。

突然、エウリノームの頭に突拍子も無い考えが浮かぶ。それは彼にとっては唾棄すべきものであつたが、一度思いついたそれは一瞬にして彼の中で打ち消すことが出来なくなるほど大きく膨れ上がつた。「まさか神は、魔物相憐れみ、というわけで私達兄弟の仲を戻そとでも……？」

数百年来の凄まじい怒りに突き動かされ、エウリノームは手袋を外した拳で玉座を殴つた。
バラバラに崩れる玉座。

それは五人の兄弟が王位を巡つて争つていた頃、たつた一つの神の呪いによって離散していく様子に似ていた。

「ふふふ、もう飲めませんか～イワキリさん～」

「う～目がまわる～」

寄りかかって甘えたように言つベルフェゴールと、ふらふらで机にぐたーっとなるイワキリ。

そんな様子を面白そうに笑いながら・・・しかし内心では油断無く緊張している鬼怒川。

綱引きの綱のように張りつめている。

体が火照り、上気しているものの、「意思の力」によつて彼の精神状態はアルコールによる影響を逃れていた。

なぜ突然酒を出したりしたのか。
彼は僅かにだが、疑つていた。

その真意を確かめるために、敢えてベルフェゴールの打ち上げの提案に賛成しているように見せかけたのである。

もしや彼女は実は魔物か盜賊団の仲間で、隙を作つて我々一人を殺そうと考えているのではないか？

それとも実は彼女はどこかで入れ替わつていて、今の彼女はベルフェゴールの姿をとつた偽者なのではないか？
グラスを傾けながら、いつでも杖を握れるようにと肩の凝りをほぐす。

そしてベルフェゴールは確かに企んでいた。しかしそれは鬼怒川の考へているようなものではなく、ささいな、でも彼女にとつては重大なものであつた。

「もう、起きてくれないんなら起こしちゃいますよ~」

彼女は突つ伏していいるイワキリを横向きにすると、彼の唇に自分
の唇を重ねた。

いわゆる「キス」である。

さしもの鬼怒川もあまりに突然すぎる事態にフリーズしてしまった。彼は様々な事柄に対し起こりうる展開を数通り考え付くことが出来たが、これには予想外過ぎて事実を認識すること自体に2秒の時間をしてしまった。

キスする瞬間、ベルフュールの目は「マジ」だった。決して酔つた上での出来事ではない。

明らかな確信犯である。

そしてそれは何を意味するのか。

そこまで思い至つて鬼怒川はやれやれと苦笑した。

酒を出したのは酔うことによってベルフェゴール自身を思いとどまらせる理性を吹っ飛ばすため。

飲んだイワキリが彼女がしたことを見えていないように、また仮に覚えていたところで「酒の席だから」とじまかせるようにするため。このベルフェゴールとやら、可愛い顔して結構な食わせ者だな。鬼怒川は自分の最悪の予想が外れたこと若干安堵しつつ、新たに発生した問題に頭を痛めながら片づけをするためにグラスを降ろした。

「ん、ん~?」

イワキリはガチガチに固まつた体を起こしながら、自分が昨夜酔つ拝つてテーブルに突つ伏して寝てしまつたことを思い出した。

「つたく、ベルフェとキスだなんて、どんな夢見てるんだよ俺・・・」

妙にリアルな夢だった、と彼が思い返していると頭痛に襲われた。

「14にして二日酔い・・・どんだけ荒れてるんだか。」

目を細く開けて辺りを見回すと、かなり散らかっていたはずの室内が全て綺麗に片付けられていた。

はつと肩に手をまわすと、寝てしまつた自分に誰かが制服の上着をかけてくれたということに気がついた。

「お礼言つておかなきゃ・・・」

彼は鬼怒川の部屋を訪れた。

ドアをノックすると普段通りの鬼怒川が出てきた。

彼には一日酔いの影響がなかつたらしい。

「おはよウジヤコモス先輩。」

「ん、おはよウ。」

「昨日は片付け手伝わなくてすいませんでした。それに上着も「いやいこよあれぐらー。それに上着はベルフェゴールが掛けたんだ。」

そこまで言つて鬼怒川は思い出し笑いをするよひよひと微笑する、イワキリに問いかけた。

「見たところ一田酔いのようだが、昨日の記憶はどりだい？」

「記憶・・・? はつきりしますよ。」

「それならベルフェゴールがした」とも・・・」

そこまで言われてイワキリは夢うつつの中、自分にベルフェゴールが上着を掛けてくれたことを思い出した。

「・・・あ、よく考えれば、そつか、そつだつたか・・・」

「ふふ、驚いただろ?」

「え? いや、嬉しいかつたですけど、そこまで驚くようなことでも・・・」

そのセリフに鬼怒川は耳を疑つた。

彼は昨夜の「キス」を「ベルフェゴールがしたこと」として話していたので、イワキリがどう解釈したかなんて露知らず、驚いていないイワキリに驚いていた。

「ほ、ほう・・・ちょっと予想が外れたな。」

「まあ元の世界にいた頃もあんなことありましたし。」

「初めてじゃない! ?」

「あ、いや、もちろん酒を飲んでぐでんぐでんになつて・・・とい

うシチュエーションは初めてでしたけど・・・先輩?」

イワキリは話の途中から額に手を当てて、何やら考え込んでいる鬼怒川が心配になつて声を掛けた。

「イワキリ君に対する印象がかなり変わつてしまつたな・・・」

「へ? どういう意味ですか?」

「まあ気にしないでくれ。過去は問わんよ。それよりそろそろ朝食

の時間だからベルフュゴールを起こして行こう
「うう、
イワキリは前半のセリフに疑問を抱きつつ、鬼怒川と共に彼女の部屋へと向かつた。

第一二三話（後書き）

今話に未成年飲酒を擁護する目的は一切ありませんので。一応断りを入れておきます。

第一一十四話

飛行船の自室で、ベラドンナはゆっくりと流れしていく雲を眺めていた。

その手には報告書が握られている。

彼女はタグリヌスの魔物が死んだと知るや否や、直ちに魔導師の部下を数名派遣して海底を隈なく探らせた。

しかし魔物の巣窟も魔具も見つからなかつた。

これは何を意味しているのか。そして次に自分は何をしなければならないのか。

ベラドンナは目を閉じ、今までの情報を正確に分析していく。

魔法の弾丸によって吸い取られた魔力が尋常ではなく、暗殺に当たったローズが体調を崩していることから倒した魔物が「五つの座」であることは間違いない。となればこの「五つの座」は自分の住処と手下がない孤独な存在だつたのだろう。

ならば魔具が無いのはなぜか。これには二つの解釈がある。

一つ目、そもそも魔具なんてものは存在しなかつた。

二つ目、戦闘中にイワキリ達が奪つた。

後者ね。ベラドンナは即座に判断した。

「汝の欲する英雄は、セラティエルに現れるだらう」夢のお告げの内容はこうだ、トイワキリ達には言つたが実は続きがある。

「英雄を手にすれば、汝が得よつとする宝物への道は開かれる。 . .

・ だつ け ね。」

宝物は即ち、五つの座が持つ魔具のこと。それ以外考えられない。となれば「魔具は存在しない」という仮定は消える。

それにトイワキリ達が奪つたとすれば合点がいく。

英雄が魔具を持っているのだから、その英雄を手に入れれば当然自分がものになるからだ。

しかし、とベラドンナは雲を眺める目を細めた。

英雄を手に入れる＝魔具入手ということであれば、果たして「道が開かれる」という表現を使うだろうか。そこだけがどうしてもしつくり来ない。

そんな彼女の耳が、室内に響くノックの音を捕らえた。

「開いてるわ。」

重厚なつくりのドアが静かに開かれる。

「失礼します。先程3人組が乗っていたと思われる船が発見されました。中は無人であつたことから・・・」

「奴らは死んでない。」

皆まで言わせず口を挟んだ。

くだらないことを聞かせるな、私の考えの邪魔をしないで。部下の顔さえ見ていない彼女は態度で感情を表していた。

どう答えたらいいのか戸惑う部下を前に、ベラドンナはしようがないわね、とばかりに聞いた。

「帆、どうなつていた？」

「降ろされました。」

「普通、魔物と戦闘して敗れて海に落ちたのだとしたら、帆はそのままになるでしょうね。それがわざわざ降ろされていたといふのは流されいかないようにするため。そして私達に敢えて発見させて、死んだのだと勘違いさせるため。」

もう用はない、とばかりに背を向けるベラドンナを前に、部下は成すすべもなかつた。

「・・・失礼しました。」

背後で扉が閉じる音を聞きながら、彼女は結論を出した。

奴らはただ職業として魔物を狩っているわけではない。理由は分からぬが自分と同じように魔具を狙っている。

「面白くなつてきたわね。」

自分の要求に対し「NO」といったイワキリ達は絶対に殺さなければならない。しかし急ぐ必要は無い。じっくりでいいのだ。

「この私に敵はいない、他者は味方か獲物にしかなり得ない。」

なぜなら、力は圧倒的な力の前では無力となるから。

悪魔じみた自信と能力を持つ彼女の中では、それが真理だった。

自分のペースで事を進めよう。

彼女は報告書を丸めると、空中に放り投げた。

彼女の影が立ち上がり、音も無くそれらを飲み込む。

後には静寂だけが残つた。

ここに来て心配事が増えるとは・・・

鬼怒川は唇を噛んだ。

無知な信仰と盲目的な愛情。

彼が最も忌むべきものとして心の中に刻み込んでいる事柄である。この一つは人間の理性と良心を刈り取り、どんな恐ろしい行動をも強いることができた。

しかもそれだけで行動の「根拠」となり得る。

神がこう言つてゐるから、あの人人がこうなることを望んでゐるから。中には例外もあるうが、救いようの無い程残酷な出来事にはこの2つが絡んでゐる。

理性を重んずる彼は、それ故に無宗教で恋愛感情を意図的に封じていた。

それが人間として不自然な生き方であることも、彼は分かつてゐた。

鬼怒川は横目で旅の仲間を見る。

楽しそうに話す2人。

今、この2人がどういった関係なのか、鬼怒川は正確に把握していない。しかし友情とは別の感情が芽生えているのだとしたら、困る。今は良くて必ずや魔具を集め元の世界へと帰るのだから、別れが訪れるのは必定。その時どのような不都合が生じるのか・・・

鬼怒川は決して楽観的な見方をしなかつた。それが彼の長所であり、

最大の欠点だつた。

「先輩、思つてたよりも報酬もらえましたね。」

「ん、ああ。それはまあ五つの座を倒したわけだからな、あれ位貢えなければ逆におかしいだろつ。」

数日間かけて首都へと到着した彼らは王城への報告を済ませ、王城からエイムまでの道を歩いていた。

時折下級のモンスターに遭遇したが、3人の前には1分と立つていることは出来なかつた。

緩やかに流れれる時間。

没しかけている太陽を眺めながら、ベルフェゴールは幸せを感じていた。

かつてイワキリと森からエイムまでの道のりを歩いた時の空とよく似てゐるが、今は彼とも仲直りして、しかも単なる旅の仲間以上の関係になつてゐる。

彼女もいつか、別れが訪れるのは分かつてゐた。この旅が終われば再び会うことは決してないことも分かつてゐた。故に彼女は自分の思いをイワキリに伝えるつもりは無かつた。そしてこの一瞬の時を大切にしたかつた。

いつ死ぬとも分からない旅の中で、タグリヌスの魔物を倒し、暗殺団の追跡が途切れた僅かな空白の時間の中、彼女はおぼろげに描いていた思いを実行に移した。

イワキリは彼女がキスしたこと夢だと思い込んでゐる。だからそれは彼女だけの思い出。

少女の恋愛感情にしては、あまりに切な過ぎる考え方だつた。
しかしその平穏は、ベルフェゴールが考へていた以上に早く崩れ去ることとなる。

「あれ、エイムの尖塔に何かいますね。」

イワキリの視力が塔の上にうずくまる「何か」を捕らえた。
羽毛の塊。それが彼の第一印象だつた。

「む、何かいるのか?」

「何でしうねあれ・・・巨大なカラスが首をうずめて寝ているような感じですけど・・・」

彼が眺める中、謎の物体は視線を感じ取ったようにむくり、と動き出し、その巨大な羽を広げた。

息を呑むイワキリ。

3人のハンターに向かつて優雅に微笑するそれは、セラティエル国で伝説として語り継がれている存在だった。

「エウリノーム！？」

イワキリが叫ぶのと同時に、背から黒い翼を生やした魔物が指を鳴らす。

「こっちを見る」と言わんばかりに。

瞬間、長い歴史を持つ莊厳な街並みが紅蓮の炎に包まれた。

「火事・・・」

「本当ですかイワキリさん！？」

目を凝らすベルフェゴールと鬼怒川。彼らの目にも夕刻にしては不自然な程明るい街が映る。

「ど・・・じうしましょ。この距離じや・・・」

口に手を当て慌てるベルフェゴール。

何年も森の獣と渡り合ってきた彼女も、この出来事にはすっかり狼狽してしまっていた。

「・・・そうだな、とりあえず私とイワキリで街に向かおう。ベルフェゴールさんは王城に戻つて応援を呼んでくれ。」

冷静に判断を下す鬼怒川だが、その顔は街の炎と反比例するように険しく暗い。

「二人乗りだイワキリ君。飛ばすぞ。」

「・・・・・」

「おい！」

「あ、はい。」

イワキリは突然の出来事に僅かの間、放心していた。

一般市民を巻き込んで火をつける。それも理由の無い、強いて言え

ば自分の殺人衝動を満たすために。

それは人の表情をつぶさに観察し、時には一歩も一歩も引いて場を乱さないようにするイワキリにとって、まさに自分の道徳感情の対極にある行動だった。

それまで魔物に対し「自分が倒さなければならぬ対象」と認識はしていても、別に特別な感情は持つていなかつた。しかしエウリノームの行動が、直感を行動の最終的根拠とするイワキリの逆鱗に触れた。

絶対に許さない。

王城へと走っていくベルフュゴールを見つつ、イワキリは疾走する杖の上で自分の刀を出した。

いつ、どの角度から見ても凶悪なフォルムであるそれも、彼の精神に呼応してか闘志を纏っているようであつた。

イワキリは思った。

今更英雄らしいこと言い出すのもあれだけど、あいつは殺されねば。

彼の足が震える。それは単なる杖の振動だけではなかつた。

・・・・何を臆しているんだ俺は。昔からやればできる奴だつたよな？

その問いに肯定するよつて、大剣は夕日を受けてきらりと光つた。

第一十五話

王城までは10分弱。

日常的に狩を行っていたが故に、同年代の少女より体力のあるベルフェゴールは、しかし息が上がり始めた。

不安。それが彼女の中で渦巻いていたことが原因の一つにある。彼女の不安。

もし自分が間に合わなければ尊い人命が無数に失われるということ。仮に失敗をしても最悪自分が死ぬだけで済む森での生活と決定的に異なる。

その事実が彼女の心を縛っていた。

「・・・あ！」

彼女は足を止めた。

目の前に大型のモンスターが立ちはだかった。

歯を剥き出しにして涎を流すその姿は狂犬を思わせる。

鬼怒川やイワキリなら秒殺の相手でも、ボウガンを持つていらないベルフェゴールには強敵だった。

「・・・来ないで！」

ベルフェゴールは腰の短剣を抜いた。

鬼怒川が一応、ということで彼女に預けたタグリヌスの魔具である。

切つ先が自分に向いているのを見るや否や魔物は目を細めた。

慎重にこちらの出方を伺っている。

彼女は短剣を握りなおした。

自分にはきっとこの魔物を倒すだけの力も素早さもない。

しかし飛刀術ならば、あるいは倒せるかもしれない。

ベルフェゴールは深呼吸した。

重さを確かめるように強く握る。

そして一気に間合いを詰めると、4回きつかりのところで短剣を振り上げる。

途端に魔物が口を開けた。

「ガルルルルルルル！」

振り下ろす瞬間に咆哮が放たれた。

それに動搖した彼女は、持つ手を僅かに滑らせてしまった。

短剣は魔物の頬の横を通り過ぎる。

魔物は歓喜の表情を、ベルフェゴールは絶望の表情を浮かべる。

今、短剣を外してしまった。

残る武器はレオナールから奪つた毒薬の詰まつたビンのみ。しかしそれをどうやって体内に取り込ませればいい？

ビンを魔物の口に突っ込むしかない。

彼女は覚悟を決める。

しかし、決着は拍子抜けするほどあつけなかつた。

脇を抜けて地面に突き立つはずの短剣が180度方向転換して魔物のこめかみに刺さつたのだ。

「・・・え？」

今度ばかりは魔物もベルフェゴールも同じ表情を浮かべる。
そして魔物は傷口から全身が崩れ絶命した。

「これが魔具の力・・・？」

彼女はベラドンナのセリフを思い出す。

盗賊団は別に希少価値から魔具を狙つてているわけではない。
何らかの魔力を持っているからだ。

「これは・・・とても盗賊団なんかには渡せないわね。」

拾う短剣も先程より重く感じられる。

鞘に收めると、ベルフェゴールは再び城への道を急いだ。

第一一十五話（後書き）

大変長らくお待たせしました。
諸般の事情により更新が滞っていましたことをお詫び申し上げます。

第二十六話

渦巻く火炎が逃げ遅れた人々を包む。

そしてその中で牛の頭を持つ怪物が住民を手当たり次第に殺していった。

それを眺めるエウリノームは、しかし楽しんでいふと言つよりも何かに待ち焦がれているようだつた。

「早く來い・・・私はこんな自分が何もしない復讐には飽きてしまつたんだよ・・・」

普通の人体では、彼の膂力は満足できなくなつていて。

これは大掛かりなフェイク。

これを知つた英雄は駆けつけなくてはならない。

自分の妹を倒した連中といふことは、少なくとも瞬時に勝負が決まつてしまつような雑魚ではない。

やはり、私の目に狂いは無かつた。

「抗つて私を満足させろ。そして死ね。」

大火事の中、彼の高笑いが響く。

「あーあ。本当にお前の能力は便利だよなあ。」

「うるせえ黙れ！」

「静かにしなくちゃならねえのはお前の方だろペヨーテよお。」

悔しそうな舌打ちが響く。

エイムのある狭い路地に一人の男が身を潜めていた。

「ダイスの目」構成員のペヨーテとコブラである。

三人組が生きていると知つたペヨーテが近くにいた彼と合流、追跡を続けようとしたところで魔物の襲撃にあつたのである。

「・・・なあ、真面目な話本当にお前のペットちゃん達は呼べない

のか？」

「コウモリにとつて魔物は天敵だからな。俺とあいつらは主従って言つより協力関係だからさ。不利益を強いることはできない。」

やれやれ、とばかりに大げさな身振りで肩をすくめるコブラ。ペヨーテはイライラしつつも突つかることが出来ない。

「ま、エウリノームと英雄の始末は俺がやつとくから、お前はどっちかがエイムから逃げないように入り口で見張つてろよ。」

分かつた。としぶしぶ頷き、魔物に見つからないようこつそりと街の入り口へ向かうペヨーテ。

その姿を「ざまー見る」とニヤニヤ笑つて見送つていたコブラだが、煙に姿が隠れると表情を引き締め、自分の愛刀を抜いた。炎に照らされ純白の輝きに磨きがかかっている。

こいつを血で染めれば、どんな宝玉でも叶わない美しさが宿る。奇しくもエウリノームと同じ危うい笑顔を浮かべながら、コブラは手始めにこちらに接近してくる魔物をただ一太刀で両断した。

「さて、エウリノームとやらはどこにいるんだ。」

コブラは考える。

エイムの放火の目的はおそらく人間への「復讐」

それならどこかでこの様子を眺めているのではないか？

上空を見回すと案の定、尖塔の頂点に黒い影が見えた。

コブラは最短距離を突つ切るために丁度横切つている魔物の群れへと突っ込んだ。

彼にとつて手先の魔物は障害物以下の存在でしかなかつた。

スナイパーであるローズは漁夫の利を狙つた戦法を取つたが、接近戦主体のコブラはそれと正反対であつた。

ターゲットはお互い、死闘の「準備」を整えている状態。ならばそれが始まる前に両方叩けばいい。

それより何より、彼は待つということが苦手であつた。

「斬つて斬つて、斬りまくるぜ・・・」

彼の耳には魔物の怒号が観客の声援のように聞こえている。

魔物の死体は瞬時に灰になり、ゴブランへと降りかかる。

第三者から見れば死闘なそれも、当の本人には肩慣らし同然であつた。

「結局よ、人間つていうのは積極的に行動を起こしそうとしなければ何にもできねーんだよ。待ちなんて糞食らえだぜ。なあ魔物さん共よおおおお」

ローズがその「待ち」が出来なかつたために敗北したことなど、彼は知る由も無かつた。

第一十六話（後書き）

すいません今回も更新遅&文量少で・・・
4月入つたらなんとかしますんで、ざつか暖かい日で見守つてやつ
てください。

第一一十七話

「……」いつはひどいな。」

「そうですね……」

イワキリと鬼怒川は街の中ほどで杖から降り駆け出した。

戦闘のためにも、魔力を温存しておかなければならぬためである。「雑魚を始末する時間も惜しい。ここは一手に分かれて搜索しよう。」

「もし尖塔にいたら俺登れませんよ?」

「エウリノームの性格からして私達を見つけて逃げようとするとは考えにくい。そもそもこの殺戮 자체私達を誘つてるものだらう。戦闘が始まつたら片方が駆けつけるようにしよつ。」

つまりこの殺戮も、エウリノームにとっては必要な犠牲?

イワキリは怒りで自分の言葉をよく吟味しないまま発してしまつ。

「……先輩は、人を殺したことがありますか?」

業炎の中にも関わらず、全ての音が止んだような気がした。

「……無い。」

いつもと変わらない、鬼怒川龍一の声。

その事実に安堵と疑問の感情がイワキリの中で膨れ上がる。

「……でも先輩、虐殺墮天使つて……」

「腕の骨を叩き折つてもう盗賊として生活できないようにしただけさ。再起不能にした数は、確かに盗賊団にたてついた人間の中で一番多いだろうな。」

そうでしたか、とほつと胸をなでおろすイワキリ。

鬼怒川がどんな顔をしてそのことを言ったのか、後ろを走っていたために気づくことは無かつた。

「さて、そろそろ一 手に分かれ……」

そこで切れるセリフ。

追いついたイワキリもげんなりな顔になる。

そう広くない道、2人の前に男が立ちふさがっていた。

口元以外全身包帯で巻かれ、左手には抜き身の刀を下げていた。

この状況で目の前の人物がただの怪我人であることを期待するほど、2人も甘くない。

数秒後、鬼怒川が口を開いた。

「・・・火事場泥棒ならよした方がいい。今の俺は・・・とても機嫌が悪いからな。」

鬼怒川の一人称が「俺」となるのは黄色信号。

彼が纏う雰囲気も普段の温和なものから徐々に変わり始めている。「魔物つてよ」、斬つても血が流れねーんだな。俺はさつき初めて知つたぜ。」

鬼怒川の殺氣を軽く受け流す包帯男 ロブラ。

「と、いうわけで、だ。ちょっとつまんなくなつたから人が斬りたくなつて来た訳よ。俺はあんたらの始末の任務も請け負つているから丁度都合がいいわけだ。」

「・・・先輩。」

「ああ、任せた。」

2人で当たればおそらく倒せるだろうが時間がかかる。ここは一手に分かれるべき。

両者とも同じ結論に達した。

鬼怒川は道を引き返し、イワキリは刀を出した。

「ほおお、あんたが来るか。楽しませてくれよ」

コブラとイワキリは刀を構える。

そして 走り出す。

イワキリが刀を投げる。

コブラは低い姿勢から更に身をかがめ刀の襲来をかわした。

肉食獣のような態勢からコブラは刀を上段に振りかぶる。

今のイワキリは武器を手放し、無防備に見える。

勝つた。

双方の思考が一致する。

イワキリは刀を呼び戻し、射程に入つたコブラに下から切り落つた。
しかしコブラは動じない。

自分の腹にイワキリの刀が入る寸前、跳躍。

刀を踏み台に、空中で身を捻る。

そしてイワキリの背後を取つた。

「しねええええ！」

純白の刀を突き出そうとして・・・動きが止まつた。
イワキリの後姿には微塵も動搖が現れていなかつた。
なるべくしてなつた状況。

明らかに勝利を確信している気配。

「つぐ！」

「理」よりも自分の直感を信じ、バツク^mで² mほど離れる。
直後、イワキリの大剣がコブラがいた地面にざつくり刺さっていた。
イワキリは下から切り落つよう見せ、その勢いで空中に放つたのである。

動作をやめなければ、やられていたのは明らかにコブラであった。

末恐ろしい奴。

コブラは歯を食いしばり、今は向き直つて正対しているイワキリを見込んだ。

20 kgはかたいあの糞重そうな大剣を、まるで手足みたいに使いこなしてやがる。

これはもう、遊んでる暇は無い。

自分の愛刀に視線を落とす。

最悪、この魔具の能力を使つことになるかもしれない。

誰もが聞けば嫌惡する狂氣の能力を、この刀は有している。
だがもう手段とか言つてられる状態じゃない。

ペヨーテのことが頭に浮かんだ。

・・・信念があつたらこの状況を変えられるかつてんだ、あのかつ

こつけめ。

コブラはまるで飛び出しあとじてゐる魚を抑えるがごとく、刀を強く握り締めた。

第二十八話

とん。

軽い音と共に鬼怒川は教会の屋根に降り立つた。目の前にはこの事件の首謀者であるエウリノームが背を向け立っている。

「君一人では倒せないよ、鬼怒川君。」

火がはせる音にかき消されないようことにやや大きめの声で呼びかける。

対する鬼怒川は無言で杖を蹴り上げ、手に收める。

武器を構えたのを見てエウリノームは苦笑し、鬼怒川が予想だにしないことを話し出した。

「君と私とは良く似ているよ、自分の目的のために手段を選ばないところとか。君が盗賊団の奴らを殺さなかつたのは良心が咎めたためではない。別の目的があつたからさ。違うかい？」

「・・・だつたらなんだというんだ？」

「いやさ、そんな強い君と対峙できるかと思つと嬉しくてさ、ちょっと言つてみただけだよ。」

鬼怒川は冷静に観察する。

目の前にやけている魔物はまったく構えていない。自然体である。それがかえつて不気味であった。

鬼怒川は杖を宙に放り投げるとそれに飛び乗り、同時に呪文を詠唱し始めた。

「悪しき魔物を灰燼へと帰さしめん！」

魔導師の呪文は魔導師ごとに異なる。

鬼怒川の詠唱も自作であった。

短く、強く。その考えのもとに唱えられた呪文がエウリノームを襲う。

街を覆っていた炎の一部が立ち上ると、エウリノームに向かつた。

てしなだれかかるように倒れてきた。

鬼怒川は巻き込まれないよう一瞬早く離脱する。

飛行の魔法を展開しつつ火炎の呪文を使うという離れ業をやつてのけた鬼怒川は、しかし油断していなかつた。

この程度で相手が死ぬわけが無い。

そしてその予想は当たつた。

全てを焼き尽くす炎の牙は黒い疾風にかき消された。

「いやあ私も久々に本気をだすことになるね。」

エウリノームの手には禍々しい大鎌が握られていた。

「さああがけ。弱者の中の強者。」

鬼怒川は大きく深呼吸をして目の前の敵をぶちのめす方法を思考し続ける。

それがまとまると、エウリノームを貫かんばかりの勢いで杖を走らせた。

一筋の閃光が殺到するのを、魔物は静かに眺めている。

そして大鎌を大きく横に振つた。

二つの影が交差し……

「ほう・・・死ななかつたか」

どさり、と倒れこんだのは鬼怒川であった。

左肩の刺し傷から血が流れれる。

「今ので死ぬと思つたんだが・・・」

勝ち誇るでもなく、不思議そうに呟くエウリノーム。

鬼怒川はその瞳に深い敗北感を宿しながら、今起きた出来事を考えてみた。

本来、あの大鎌での一撃は師匠からもうつた義手で防がれるはずであつた。

負け惜しみではないが、自分の判断を誰も責めることはできないだ
ら。

そう、客観的に考えれば「斬りたいものだけを斬り、他のあらゆる
物質は透過することができる」なんて魔具の能力をこの場で推測し
ろという方が無理な話である。

大鎌は自分の左腕をすり抜け、首へと噛み付いてきたのだ。
どうせに身を捻り首筋へのコースは外したものの、エウリノームの
胸に杖を打ち込むとこちらの攻撃も断念せざる負えなかつた。

鬼怒川は考える。

あの時、自分がコースを変えずに突っ込んだら確実にエウリノーム
は倒せていただろう。

無論、自分の命と引き換えにではあるが・・・

鬼怒川はこの時、生まれて初めて自分の行動に深く後悔したのであ
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1320d/>

英雄になろう

2010年10月18日14時35分発行